

彼女のゾイドと荷電粒子砲

城元太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

部活見学会で出逢った彼女は、スマホに赤いアイアンコングの画像を貼り付けていた。ゾイドを介して交流するあいだに、赤いアイアンコングに込められた彼女の思い出が語られる。淡い想いを抱きながらも、近づけそうで近づけないもどかしさを感じながら、限られた高校生活の時間は着実に過ぎていった。

⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
(最終話)														
100	92	83	74	66	58	52	45	37	31	25	19	13	7	1

目次

①

とりあえず、僕がゾイドを知ったのは、確か小学4年のころだ。
テレビでライオン型のメカが戦っていた。

もちろん前からアニメが放送されているのは知っていたけど、それまではガンダムひとすじだった。友だちが沢山ガンプラを持っていて、僕も負けずに、というか釣られて買って、完成したガンプラを見せ合っていた。

でも、そいつとは急に仲が悪くなった。そいつが作ったモビルスーツと、自分の作ったモビルスーツと、どっちが強いかって言い合いになったんだ。実在しないメカの性能を巡って言い合いするなんて、今思うと恥ずかしい思い出だ。

そいつはモビルスーツの設定にやけに詳しくて、言い負かすことができなかった。勝ち誇って見下すような表情を浮かべられた時、僕の中で急に何かが切れたんだ、「たかがプラモじゃないか、じつさい動きもしないのに」って。

ケンカのあと、家に帰って机の上に並べたガンプラを見渡して全然魅力を感じなくなっていた。

ガンダムの良さはわかっている。好きな人の趣味を否定しない。でも、その時の僕はガンダムをあいつと一緒にしていた。とたんにガンダムが嫌いになって、すぐにダンボールに詰めると近所の中古ショップに売りに行ってしまった。もちろん小学生だけでは買取してくれないから、母親といっしょに。

母さんはすぐに納得してくれた。

「あきらちゃんもおもちゃ卒業なのね」

「ちゃん」付けされるのにも恥ずかしくなっていた頃だし、確かに少し飽きていた。だから売り払って、あいつとは違う遊び、そう、カードでも買おうと思っていた。

店に行って、売り払った千何百円かのお金を手にした。母さんは「好きなものを買ったら」と言ってくれた。じやまなプラモが片付いたのが嬉しかったのかも、それにこれで勉強に集中してくれると思っ

たのかもしれない。僕は中古のおもちゃ売り場を歩き回って、ふと見つけたものがあつた。

真つ赤なゴリラ型をしたロボット、『アイアンキング・PK』って書いてあつて、値段もすごく高かつた。

(なんだい、たかがサルのロボットじゃないか。なんであんなに高いんだ)

それより僕は、その棚の下にあつた白いライオン型ロボットに目が留まつた。

『ライガーゼロ』、それに換装パーツが2種類ついて千円ちようど。組み済みだったけれど、きつと前のオーナーは几帳面な人なんだろう、バリもきれいとつていて、状態もすごくよかつた。ゾイドって動くおもちゃのはず、ガンダムなんかよりずっといい。

僕はコンパクトに畳まれた箱と組み立てられたライガーゼロを持ってレジに並び、母さんがあきれた顔をしてみていた。

結局カードは全然買わなかつた。どんなに綺麗でも、あれつて所詮「紙」じゃないかつて。けっこうひねくれた小学生だったのかも。

さつそく家に帰って電池を入れてみた。

まっすぐ歩かないんだよね、特に床の上つて。それでも、付属していた換装パーツ、「イエーガー」と「パンツァー」に代わる代わる交換して、机の上に飾つて眺めていた。

それが、僕がゾイドに少し興味を持つきっかけだった。

アニメシリーズが何種類か放送され、ゲームが発売されたのも知つていた。あれから何個かゾイドを買つて、幾つか机の上に並べていたけれど、僕はあつという間に成長していった。

中学ではバスケット部だったけど、別にバスケットに魅力を感じていたわけじゃない。ただ、兄とクラスの友達何人かに誘われただけのことだ決めていた。試合に勝てば楽しいし、負けても悔しくない程度。他にやる部活がなかったから、やっていたようなものだった。

僕らの地区が弱かつたのかもしれないが、地区の総体では2〜3位に入賞するけど、県大会に進んだとたん一回戦負けをするレベル。僕は3年生の夏までレギュラーと補充要員を行ったり来たりして終わ

りになった。いっばしの先輩面して、後輩に「あとを任せたぞ」なんて、気が利いたことを言ったような言わないような。

その間、無難に勉強もやって、時々机の上のライガーゼロと、エレファンダーを動かして気晴らしをしていた。

ゾイドって、夢中になる人がいるみたいで、僕の生まれる前からあったこと、「バトルストーリー」といって、独自の歴史観があることを兄から聞いた。

ガンダムだっているいろいろ歴史設定があって、それを楽しんでいる人は多い。だって大型ショッピングセンターのプラモ売り場では、子どもより大人の方が多かったし、他でもない僕の父親も何度か手にしているのを見たことがある。技術系の仕事をしていて、メカニクにも興味があるらしい父親は少し気恥ずかしいのか、僕が来るとすぐに棚にもどしていたけど。気にしなくていいのに。

僕と言えば、時々あの中古ショップにいった、気に入ったゾイドを買い揃えていた。店の棚にあった『アイアンキング・PK』はいつの間にか無くなっていて、今さらながらあれを買っておけばよかったと思っていた。

カッコいいと思うより、プレミアアがついたのが惜しかった。小遣いかせぎになったかな、なんてイヤらしい考えだったけど。とにかく、僕の中であの赤いアイアンキングは心に刻みつけられていたんだ。あの時ももう一度目にするまでに。

灰色の受験勉強の話聞きたい人はいないだろう。僕は担任が示した学力相応の高校を志望し受験した。少子化の影響で、極端な学力差があったり、中学在学中によっぽどの悪さをしていなければ受かるはずだったし、事実合格した。

入学式のあとクラス発表を終えた新学期。中学バスケットで知り合った他中の生徒と一緒にクラスになって、とりあえず顔見知りは何人かいた。

「吉山、お前はまたバスケットやるのか？」

声をかけてきたのは押川三郎。中学の時のライバルで、総体では何度か対戦している。ジュニアでは同じチームだったから腐れ縁。で

も僕はしばらく様子をみようと言った。だって、うちの高校の男子バスケって県でも強豪で、練習の厳しさも聞こえて来ていたから。

中学の部活で貴重な青春時代の時間をたくさん浪費(?)してしまっただし、もうわざとらしい熱血スポーツはコリゴリだと思ったので、まずは何度か体育館に行き来をして、慎重に様子をみようともちかけた。

体育館のギャラリーには、僕と同じように部活見学をする新入生が何人もいて、その反対側には女子バレーと新体操、それに剣道部の女子が並んでいる。

期待しないでほしい、新体操と言ったって、練習でレオタードを着るわけでもないし、バレーだって普通のジャージ姿だ。それよりも、制服姿で見学をする新入生女子を見学する方が、“男子の本懐”というものではないだろうか！

……話しが脱線した。とにかく僕は、初々しい制服姿の新入生女子を、ボールよけのネット越しに物色するように見ていた。

ふと、ギャラリーの端、一番奥の柱の陰で、少しうつむいて携帯電話の画面を見つめている女子をみつけた。

少し茶色がかった髪に、真っ赤なケースのスマホを手にしている。真下で新体操のリボンとバレーボールが代わる代わるギャラリーの高さまで上がっているのに、一切気にしないでスマホ画面をみているんだ。

何のために体育館に来たのかわからないじゃないか、見学しないなんて。

でも、まあ、人それぞれに事情つてもんがあるんだろう。少しさびしげな影がある女の子は、ついつい男性を惹き付けるもの、僕はその程度の自己分析は出来る位に成長していた。

いつの間にか見学時間が終わり、女の子たちもギャラリーから降りていく。僕たち男子も、一緒にギャラリーを降りる。誰とは言わずとも、女子と一緒に帰りたいからだ。そんな下心、男だったら持っているもんだらう。

「どうだった、……さん」

「あら、押川君。バスケット部入るの？」

「どうしようかな、俺、フィジカル弱いし」

おい、お前はいつからメンタルが強くなったんだ。県大会進出のためのお前3位決定戦で僕の中学に負けて、メソメソ泣いていたのはお前じゃないか。

ま、いつか。話しのきっかけをつかんだんだから。

僕は悪友を置き去りにして、入り口近くに置いたバックを持ち上げる。背負って立ち上がろうとして、下駄箱の影から不意に現れた人影に軽くぶつけてしまった。

すのこ状の下駄箱の板の上に、赤いスマホが乾いた音を立てて落ちた。いまだに二つ折りタイプのガラパゴス携帯の僕にとって、憧れの機種だ。自然、画面に目を向ける。

そこに僕は、実に意外な画像を目にした。

「アイアンコング・PK？」

思わず声にした。あの日見た、あの赤いゾイドが、赤いスマホの画面に映っていた。慌てて拾い上げようとしたら、その女子はまるでひったくるようにその携帯を拾い上げた。

あの少し茶髪の子だ。赤いアイアンコングが映し出されたスマホを拾い上げると、まず壊れていないか幾つかの操作をしている。

「ごめん、えっと、大丈夫？」

頻りに画面操作をして、機能に問題が無い事を確認したのか、やっそこつちを向いた。

僕は危うく声を上げるところだった。

壊れてしまったのではないかと不安だったのかもしれないが、その子は少し潤んだ目をしていて、それがまた彼女の魅力を何割か増していた。

肩に掛からない程度の髪をまとめ、そこから覗く耳は少し赤く染まっている。茶色がかった瞳は、エキゾチックというほどではないけれどちよつと他の子と雰囲気違った感じだ。肌は小麦色というほどではないが、健康的に焼けていて、何よりとてもきめ細かい。胸の大きさは……それはまたあとで。

「だいじょうぶです。ごめんなさい」

「携帯、壊れていないよね」

これは、素直に僕の感情から出た言葉。だってスマホって壊れやすいと聞いているし。

「うん、ちゃんと動いてる。私もうっかりしていたの」

「あの、さっきの画面、『アイアンコング・PK』だよね。珍しいね、女子でゾイドなんて」

ここからは、話のきっかけをつかむための必死の会話。幸いにして僕はゾイドを知っている。

でも、彼女は急に黙ってしまった。僕は何かいけないことをいってしまったのだろうか。

彼女は無言で会釈すると、たちまち体育館を後にしていった。結局それ以上話せなかった。

家路に向かう間、そして帰宅後、机の上で相変わらず鎮座するライガーゼロ（パンツァー）を見つめ、ずっと考えていた。

（あの女子は、なぜPKの画像なんかもっていたんだろう）

さみしげで、はかなげな彼女の姿は、進級したての僕の心にアイアンコング・PKといっしょに刻み込まれてしまっていた。

②

引っ張り出したファンブックは全部で3冊。これは兄が買ったもので、ずっと借りっぱなしになっている。僕は二人兄弟の弟、兄は僕の三つ上で同じ高校のOBになる。当然中学のOBにもなるわけで、僕がバスケット部に入部したのも兄の影響だ。ずば抜けた運動能力というほどではないけど、少なくとも僕よりは優秀で、中学の総体の選抜陸上チームにはバスケット部所属の臨時助っ人として3年連続で召集されている。

僕の入学した高校に入るで卒業。高校在学中のスポーツ実績を評価され、地元の有力企業の指定枠に滑り込み見事就職を果たした。高卒の初任給は低いけど、年功序列は保証されていて、40歳前には必ず家を買うくらい給料が支給されるそうだと、両親が嬉しそうに話していた。

兄も勉強は好きでも無かったから、運動ができて給料ももらえる会社になつたと入れたことは希望通りだった。僕の入学式に先立つ4月1日、着慣れないスーツで身を固め、入社式に向かって行つた。ゾイドも兄の影響。ただしゾイドを買ってない。何を血迷ったか、ファンブックだけ買っていた。その頃戦闘物のライトノベルに凝っていて、同じジャンルのものとしてゾイドのストーリーを選んだらしい。当然すぐに飽きる。で、僕に貸した。それが僕の小六の時。

一度読んだけど、正直文字が多くてしつかり読んでいなかった。

でもいま読み返してみても、改めて思った。ゾイドって面白い。特に2巻のアーサーとリッツの戦い。ネットで検索をして、4巻が存在する事と、その後のゾイドの世界観の顛末を知った。ぶっちゃけていえば、ブームの終了といっしょにうやむやのうちに終了、いろいろな広がりを見せた割には、いわゆる尻切れトンボ、竜頭蛇尾。盛り上げるだけ盛り上げて、よくわからないまま終わってしまったらしい。まあ、しかたがないことなんだろう、カードにしてもシールにしても、ブームが長続きしないで打ち切りになるなんてよくあることだから。

でも彼女と会話するには、とにかくゾイドの知識が必要だ。ネッ

トだけでなく、フアンブックでもPKについて一通り調べ直すと、僕は翌日勇んで高校に登校した。

驚いたのは、彼女が自分と同じクラスだった事だ。仕方ないだろう、まだ入学したてだし、顔と名前を覚えるのに時間がかかるのは自慢できる（だから歴史人物を覚えるのにどれほど苦労したことか。その分地理の資料集の「世界の民族」の項目、金髪のお姉さんが写った写真のページは何度も見て、ゲルマン系とラテン系とスラブ系の区別、オランダ人の民族衣装にリオのカーニバルはしつかり覚えていた。イヌイットやラップ人はだめ、厚着だから）。

座席表から彼女の名前を調べた。

柏崎絵梨、エリさんか。朝のホームルーム前の時間や授業と授業との間の休み時間、それに昼休みなんかには、やっぱりあのスマホを見つめている。そこに映っているのがアイアンコングと知るひとは少ないだろう。彼女も後ろから覗きこめないアングルで見つめているし、普段の画像はどうやら普通の壁紙らしい。あんなアクシデントが無ければ、PKを目にすることは僕にもなかった。クラスの女子とも、新入生なりに多少のぎこちなさを感じさせつつも、ごく自然にお弁当を食べている。時おり笑顔も浮かべる、ごく普通の女子高生に見える。

でも、違うんだ。あのスマホ、アイアンコングが映っているだろうあの画面を見ているときだけは。

ゾイドはカッコいいから眺めるものなのに、あんな悲しげな表情を浮かべるのはなぜなんだろう。

導かれる推論。

- ①；あのゾイドは父親の形見。ちよつと無理があるかな。
- ②；あのゾイドは弟、若しくは兄の形見。これなら少し現実的か。
- ③；あのゾイドは別れた彼氏が好きだった思い出の品。この場合、死別も含む。悲しい、いろんな意味で悲し過ぎる。

最も妥当なのは推論②だろうか。とすれば、あまりゾイドの話題を振るのは賢明ではない。ただ何かの理由をきっかけに、もう一度エリさんと会話をしたかった。

「お前どこ見てるんだよ」

僕は、窓際で数人の女子と昼食とを終え、弁当箱を手際よく片付ける彼女の姿を見つめていて、その夢み心地のシチュエーションを押川が破った。お前は他人のメンタルを読み取る能力も低いのか、と心の中で舌打ちする。

超能力つてあるのなら、この気持ち伝われればいいのに。

(彼女と話がしたい)

やっと迎えた高校3年間、僕も兄と同じで勉強はあんまりしたくない。兄の様に就職が決まってしまうとすれば、これが最後の学生生活だ。この貴重な時間を有意義に過ごさなければ人生に悔いが残る。

「あの、吉山くん」

自分の妄想に没頭していた僕は、追い詰めたネズミに噛みつかれた猫の様に驚いた。シャンプーの香りだろうか、フワリとしたいにおいが周囲に漂う。彼女は弁当箱をロッカーに片付けたあと、自分の机を經由しないで背後から声を掛けてきたのだ。

「あれ……のこと、詳しいですか？」

急な展開に、隣で押川が唾然としている。女子と会話をしたことがない訳ではないが、ほとんど面識の無い、それも結構可愛い女の子に声を掛けられるのは初めてだ。視線を合わせられずに彼女の髪の毛を見る。近くで見てもつやつやの茶色がかった髪だった。

僕はせいっぱい取り繕って、いかにも普通そうに答える。

「ああ、あれのこと？ まあ、それなりに」

ネットで知ったこと。ゾイドのデーパーなマニアのことを「ゾイダー」というらしいが、高校生にもなって動くおもちゃに夢中になっていることを公言するのってどんなものか。幸いにして押川は黙ってくれたし、彼女も女の子グループから離れていた。お互いに立場をわきまえている。

「このまえはごめんなさい。あれからいろいろ考えて、あれを見てすぐわかるなら大丈夫と思って。もしよければ相談に乗って欲しいことがあるんだけど」

フラグが立った。アイアンコングは帝国軍だけど、僕の心の中でへ

リック共和国の旗がたなびく。

「動かないの、あれ」

「PKのことだよね」

「PK？ そんな呼び方もあるんだ……そう、あの赤いあれ」

お互いに『アイアンコング』という具体名を出さずに代名詞で会話するのが、まるで二人だけで秘密を共有しているようでとても楽しい。

座っている僕に、半身を屈め上目使い気味にこちらを覗う女子の願いを断ることなどできはしない。

女子高生がゾイドを持っていることも珍しいが、僕が立てた推論の様にそれが何らかの思い出の品で、動かなくなってしまった。模型や工作に詳しくない女子にとって、直せる誰かを探していたのだろう。

父親譲りで僕も技術系であることは自負していて、ライガーゼロの動力ユニットからLEDを引いてコクピットのライトを光らせる程度の改造はしている。ゾイドの基本構造は知っているから、アイアンコングの動力を直す程度の自信はある。

「実物を見ないことにはなんとも言えないけど」

「じゃあ、今度吉山くんの家に行つていいですか？」

ストーリーの進行が速すぎる。あれよあれよというまに、僕は自分の携帯番号と彼女の携帯番号を交換、その上アドレスに自宅電と住所まで伝え、週末に会う約束までしてしまった。そこに至るまで僅かに10分。

机の横から彼女が去って、茫然自失の僕を無我の境地からサルベージしたのは、押川の猛烈な羽交い絞めだった。

「お前、いつからサツカーファンになった。それにあれって何だアレって。いつから柏崎さんと仲良くなった」

どうやら押川はPKⅡペナルティーキックを連想したらしい。説明するのも面倒だし、それにまだ僕は彼女とは仲良くなっていない。しかし、ここはハツタリをかましてでも言い訳しなければ、愛に飢えた男子高校生を納得させることは不可能だろう。僕は鼻から「フツ」と息を吐くと、静かに答える。

「プライベートなことについてはノーコメント。そのうち気が向いたら教える」

思わせぶりな返答に押川は不平をもらすが、そこで授業の予鈴が鳴って話題終了。僕は頭に血が上がったまま午後の授業を受けた。弁当を食った後の眠気を誘う生物学の授業も、一切眠ることなくノートを機械的にとっていた。

少し不安なのは、僕はアイアンコングを持っていないことだった。あの日中古屋でPKを見て以来縁がなく、通常版のアイアンコングさえ手にしたことはない。考えてみれば、ゴジユラスと双璧を為す人気の大型ゾイドが流通する機会は少ない。ネット画像で見た、胸カバーの奥の単二電池と背負ったバックパックの単三電池。よくわからないが「鳴く」とあるが、どんな原理かわからない。

生物教室のホワイトボードに「オルニチン回路」と示されたんだかわからない図が描かれている。オルニチンって、テレビ通販のシミのあれか？ ほとんどうわの空なので内容が一切頭にはいつてこなかった。

彼女は約束通り、週末に僕の家に来てきた。

僕はファッションに拘りがある方ではなく、服のセンスをどうこういえるほどではないが、男子の家にくるのだからノースリーブに薄手の上着を羽織ってのひざ上スカートを期待していたのに（妄想が暴走）、現れた彼女の出で立ちは、灰色のスウェットに茶色のデニムで明らかに地味。綺麗な髪も今日はアクティブに一本にまとめられている。半袖捲りはかっこいいのかもしれないが、おしゃれ、と呼ぶには無頓着だった。

「いらっしやう」

「おじゃまします、よろしくお願いします」

緊張気味に対応する僕と僕の母親にも、彼女は全く臆することがない。やけに目立つのが、抱え込んだ大きな荷物だった。

リビングに通され、紅茶を運んで来た母親に軽く会釈をすると、彼女は母親がまだいることも構わずに切り出した。

「これなんだけど……」

見た感じより軽そうな箱で、中身を開き、新聞紙やら丸めたビニール袋やらを取り出すと、中から赤いものが見えてくる。彼女は中身をそっと持ち上げ、リビングのテーブルの上にアイアンコングを慎重に乗せた。

母親が目を見張っている。そりやそうだろう。女子高生が大型ゾイドを持ちこんで来たのだから。

僕は初めて、完成品のPKを目の前にした。

かつこいい。でも、ネットやファンブックで見た物との違いに気づく。キャノピーも赤く、背負ったマニューバスターと右肩の大型ビームキャノンの整形色がダークグレーではなく銀色なのだ。

なにより全体の赤い装甲パーツにラメが入ったような光沢がある。

ようやく気がついた。これはPKではなく、それよりもっと貴重な旧ゾイド、いわゆるメカ生体版の「アイアンコング MK-II 限定版」ということに。

③

メタリック光沢がある【MK-II 限定版】は本当にきれいで、二十年以上前のおもちやであることを差し引いても、ネットオークションで物凄い値段で取引されるのも納得できた。胸とビームキャノン、胸と連装電磁砲をつなぐフェルチューブは材質劣化で無くなっていたが、ゾイダー界限で語られる「旧ゾイドのキャップの方が材質が良い」と言うのは本当のようで、新世紀版ではありがちなゴムキャップ劣化の割れはない。それでも陽の当たる場所に飾られていたように、わずかにプラスチックに日焼けの跡があった。

アイアンコングに魅入っていた僕の視界を、まくり上げた袖から二の腕を覗かせる肌色が横切る。赤い【MK-II】に柏崎さんの白い肌が映えて（いろいろな意味で）眩しい。束ねたつやつやの黒髪をなびかせ、額にかかった後れ毛を軽くかき上げる。彼女の髪は、コングの装甲のラメと同じくらいに輝いていた。

「このメカコング、”PK”って名前だったの初めて知った」

この発言にはいろいろとツツコミどころがある。

まず往年の東宝特撮映画に登場する、エレメント^{エックス}X 掘削用の巨大類人猿型メカみたいに（※この辺りの知識は父親の影響）、彼女がアイアンコングを「メカコング」と呼んだこと。僕は一通り【PK】と【MK-II 限定版】との違いを説明し、先の発言を撤回した。どうやら『ゾイド』に関する知識は断片的のようだ。アイアンコングの名前を伝えていると、彼女は急に身体をよじらせ腰を突き上げた。そのしぐさに思わずドキっとしていると、彼女はデニムのポケットから単三電池四本を取り出した。

胸をはだけてむき出しにし、単三電池を二本入れる（※勘違いした人、残念でした！）。続けてマニニューバスターを外しバックパックに単三電池をはめ込む動作も手慣れたものだった。

「背中の電池はライト用だから、動くのに関係ないはずだけど念の為にに入れてみるね」

当然かもしれないが、彼女はアイアンコングの電源もよくわかって

いた。

腰のスイッチを入れる。しかし、彼女の言うように、コングは動くことも、コクピットライトを燈すこともなかった。接触不良を考えて、スイッチのオンオフを何度か繰り返し、手足を軽くゆすってみても、コングが動く気配はない。

「動かないの、今までこんなことなかったのに」

その時の彼女の顔は、思いつき寂しそうだった。

僕は彼女の横に寄って、貴重な【MK-II】をそっと持ち上げたとき、ふいに背中に人の気配を感じ振り向くと、キッチンの影から母親がまるで某家政婦のように覗いていた。

「あの、ここで作業するの？ 僕の部屋もあるんだけど……」

さり気なく、部屋に誘ったつもりだった（※あとで母親から「下心ミエミエ」とのご指摘を受けました）。この日の為に、床の汚れやゴミはもちろん、カーテンだって洗濯し、机の周りの子どもっぽいポスターも全部はがして、徹底的に片付けていた。ただし、机の上のライガーゼロだけは「ゾイド好き」の証拠として残して飾っておいて。

彼女は明るく答える。

「はいはい、ごよ」

敢え無く撃沈。奥で、ここまで聞こえるくらいの母親の溜息。

彼女は純粹に、ゾイドの修復だけを僕に望んでいることがはっきりした瞬間だった。

まあ、でき過ぎた話で、柏崎さんが彼女の家に僕を呼んで修理をさせようとすれば、自宅や自分の部屋に招き入れることになり、それはためらわれたのだろう。現に僕の住所は教えていても、彼女の住所は教えてもらっていない。

もう割り切るしかない。僕はコングの腰のスイッチを何度か入れ直し、全く作動しないことを確認すると、

「なかみを見るのに分解してもいい？」

と、彼女に言った。

「組立の説明書は無いけど大丈夫？（||『もう一度組み立てることは出来ますか？』）」

僕は自信たっぷりに頷く。彼女はこのタイプの初期ゾイドが、パーツ番号ごとに組立順序がきまつていることも知らないのだ。

子ども向けにセメダインを使わないで作れるプラモとして発売されたゾイドは、同じように子どもにも判りやすく組み立てられるように、パーツ内側にモールドされた番号ごとに組み立てる順序がほぼ決まっている。そんな細やかな配慮も、初期ゾイドの爆発的人気を支えたのだ。

僕は手ごころな浅いお菓子の箱を探し出し、丁寧にパーツを外し始める。

コングを組み立てたことがあるひとにとっては退屈かもしれないが、一応説明しておく、コングは装甲がフレームを覆うようになっていて、装甲が稼働と独立して装着されている。ダボが固くなかなか外しづらいパーツがあつて少しやきもきしたが、両腕から両足、頭部と次々に分解していった、遂に胴体内部の動力部分をハダカにした。

可動パーツの負荷がない状態でもう一度スイッチをオンにしたけれどやっぱり動かない。僕は父親が導通テスターを持つていることを思い出し、父の道具箱ツールボックスからテスターを拝借して、コングの動力ユニットに通電してみる。

案の定通電はなかった。

「たぶん配線が切れているとか、モーターが死んでるとかだと思う。ここでユニットを開けるのは大変だから、すこしの間このゾイドを預けてくれる?」

「直せるの?」

質問に質問を返し、彼女はまた不安そうな顔をする。

「絶対とは言えないけど、ギアやシャフトが折れている様子はなかったから直せると思う。こんな貴重なゾイドが動かないなんてもったいないよ。僕にやらせて欲しいんだ」

アイアンコングの動力ユニットは、ライガータイプのユニットと比べて複雑なので多少分解は難しいだろう。でもまだ入学したての高校生だから、受験勉強からも部活動からも解放されて、帰宅後修理に時間が使える。もはや彼女とのお付き合いを前提としたものでは

なく、父親譲りの技術者としての意地が僕を支配していた。なんとしてもこのゾイドを動かして見せる、そんな感じ。

「うん。じゃあ、お願いします」

彼女はすぐに安堵の表情を浮かべ、素直に頷いた。

それにしても、なんで女の子の少し鼻にかかった「うん、」ってかわいいだらう。

「このゾイド、大切なものなんだね」

途端に彼女は、母親が差し入れたお菓子と、二人で夢中になって分解しているあいだに冷めてしまった手付かずの紅茶を見つめ、俯いて小さく告げていた。

「……思い出だから」

「これ以上聞かないで」オーラを大放出している。彼女は見えないう赤いオーラ（日本語が変）に包まれていて、それ以上追及はできなかった。

僕は分解されたコングを前にして、修理が終わったら連絡する約束をする。

「このお礼はさせていただきます。今日は私のわがままに付き合ってくれて本当にありがとう。あれをよろしくお願いします」

玄関先で靴を履き、出て行こうとする彼女を見ている僕の横で、またも母親がキッチンの奥から目配せをしている。

「駅まで送ろうか」

「だいじょうぶ、一人で帰れるから」

との即答と笑顔を残して、彼女は去っていった。玄関のドアが閉じると、露骨に母親の溜息が聞こえていた。

そのあと僕は、早速コングの動力ユニットの分解を開始する。

精神統一が不充分だったのだろう。慎重に外したはずが、指についたグリスにシャフトごと持って行かれ、ギアの順序が判らなくなったのが15分後。

通電してやはりモーターが死んでいることを確認したのがその直後。

近所のプラモ屋にモーターの買出しに行つて、リード線にハンダ付

けしたはいいものの、ギアの順序がわからなくなり、悪戦苦闘する事2時間。気付けばリビングは暗くなり、テーブルの上からパーツを片付けなければならず、それでまた組み立てが中断。食事を終えると気が無くなり、結局帰宅した父親に泣き付いてしまった。

父は非常に個性的な人物だ。ゾイドのSF設定に関して一家言持っていて、ゴースザウラーの荷電粒子砲はオーロラインテイクファンで空気中から取り込んだ静電気を加速させ撃ち出すというが、荷電粒子を静電気から取り出すところが訳が分からない。粒子加速には超伝導ソレイド電磁石や偏向電磁石、それに超伝導加速空洞を^{ケルビン}絶対温度2度の液体ヘリウムで維持して加速するのであって、リングサイクロトロンでは充分な粒子加速には至らないはずだ」などわけがわからないことを言う。それというのも職業柄、粒子加速器の製品管理を請け負う契約社員だったからなのだ。

技術者としては優秀らしく、契約社員と言っても不安定なものではなくて、給与面では充分過ぎるほど優遇されていた。技術職を選んだ動機はどうやら『ガンダム』らしく、以前の僕以上に大量のガンプラを積んでいる（※完成品は1/10程度）。あまり売れなかった人間大ビームサーベルを母にないしよで振り回している姿を見たことがあって、その時僕は、少なからず父の遺伝子を受け継いでいると思うと、嬉しいような、悲しいような気持ちになった経験を覚えている。

父は喜び勇んでコングの動力ユニットを手にすると、ある意味大人げないほどの技術力を駆使してたちどころにモーターを交換して修復してしまった。

「グリスが少し足りないようだから、むかし残しておいたミニ四駆用のグリスを足しておいたぞ。カノジョさんにはお前が直したことにしておけ」

と言っつてサムズアップをする。かっこつけているのか何なのか……まあ、感謝した。

プラパーツの組み上げは、動力ユニットの修復に比べればはるかに簡単だ。

組み立てが終わり、電池を入れてスイッチを入れる。

コクピットライトを赤く光らせ、コングは力強く作動を開始した。首を振る動作にあわせて、動力の金属板がコングの鳴き声を響かせる。まるで本物の生物のように机の上でガシヤガシヤと歩き回るコングは勇壮だ。

(絶対に喜んでくれるよね)

僕は彼女の喜ぶ顔を思い浮かべつつ、何度も机の上を往復するコングを眺める。この光景を彼女と共有していると思うと無性に嬉しい。だけどふと思い出した。

(「……思い出だから」)

あの時の彼女は、本当に寂しそうだった。

人には踏み込んでほならない心の領域があつて、彼女の「思い出」もその一つであることは理解できる。でも理解することと、受け入れることとは別もので、僕はスイッチを止めて机のスタンドの下でメタリックレッドの装甲をきらめかすコングを見つめた。

「いったいエリさんに何があつたんだ。教えてくれよ……」

無意識に【MK-II 限定型】に問いかけてしまう。

赤いキャノピーのアイアンコングは、何も告げず、でも何かを語りたそうな顔で、僕を見ているような気がしていた。

④

修理が終わったことを伝えると、さっそく彼女は学校帰りに僕の家に来ることになった。

校門を出て駅に向かうまでの20分間、僕は人生で初めて、一人の高校生女子と一緒に並んで歩く経験を得た（入学したてだから当たり前なんだけど）。意識するほど彼女を知らないが、やっぱり緊張する。

もしかして、カップルに見えるのかな？ でも手をつないでいるわけでもないし、何より僕と一緒にいることが嫌なのかと思うくらい彼女の足取りが早い。そのわりに笑顔を浮かべていて、急ぎ足の理由はやっぱりアイアンコングにあることがわかりやすかった。

会社員の通勤時間には早いので、電車の車内は空いていて、柏崎さんは僕のはす向かいに座り、流れる景色を眺めている。自宅まで二駅あり、特に言葉を交わすこともなく、カップルと呼ばれるにはムリがあることを思い知った。

修理が終わった赤いアイアンコングのスイッチを入れ、大型ビームランチャーを上下に大きくゆらしながら歩く姿を見つめる彼女は、いろいろな感情が入り混じったような、なんとも言いようのない表情をしていた。

ぬいぐるみとか仔犬とかだったら、抱き寄せて頬擦りする場面なのだろうけれど、無骨なMK-IIの頭を指先でちよん、と撫でて、彼女はコングの腰から慎重に持ち上げる。

かすかに瞳がうるんでいた。彼女にウソをつくのがためらわれたから、最終的に父親が修理したことを正直に言っていた。

「ほんとうにありがとう。私の一方的なお願いに応えてくれて。あの時声をかけてくれなければ、永遠に直らなかつたと思う。お父さまにも、ありがとうございました、と伝えてください」

その感謝の言葉は、心の底から告げられたものだった。

彼女は僕の家最初に来たときに残しておいたダンボール箱に、ビールや新聞紙やらを詰め込んでアイアンコングを梱包するが、ここ

で問題が発生する。学校から直行したので学生鞆も持っていて、アイアンコングを梱包した大きなダンボール箱を持つと、両手がふさがってしまうということだ。

相変わらず某家政婦のようにキッチンから覗いている母親がやたらと目配せしてくる。

「家まで一緒に持って行こうか」

彼女はいつしゅん戸惑い、しばらく考え込む。

すぐにでも持ち帰りたい、でも一人では不可能。無理をしてダンボールと学生鞆を持ってなくはないが、万が一帰り道の途中でダンボール箱を落したりぶつけたりしないとも限らない。時計は退勤時間になっていて、電車内も混雑が始まっているだろう。

やがて彼女が申し訳なさそうに言った。

「よろしくお願いします。そのかわり、今回のお礼に一緒にお食事しませんか」

母親が満面の笑みをうかべ頭上で両手で丸を作る。

僕は駅から来た道を、柏崎さんと鞆とアイアンコングを詰めたダンボール箱といっしょに駅へ戻ることになった。

彼女が買った乗車券は、この駅から三つ目の、僕の家とは反対方向の駅。帰りの電車で一緒にならない理由がわかった。

運良く車内はそれほど混雑していなかった。

不思議な組み合わせ、いや、この場合「持ち合わせ」とでも呼べばいいのだろうか。アイアンコングを入れたダンボールは彼女が抱え、僕は彼女の鞆を持っている。大切なアイアンコングは自分で持っていたいという願われに違いない。大きめのビニール袋に入れられているが、彼女は袋の取っ手を持たず、終始抱え込んだままだった。

改札を抜けて歩くこと15分、三棟ならんだアパートの前まで到着する。

「ちよっと待ってて」

彼女はダンボールを持って真ん中のアパートに入り、しばらくして今度は僕が持っていた鞆を受け取るともう一度アパートに戻っていく。

次に現れた彼女は、制服の水色のブラウスに白のパーカーを羽織り、デニムにはき替えていた。MK―IIの華やかさに比べ、随分と地味なファッションセンスだな、と脳内で失礼な印象を呟く。念のため報告しておく、やっぱり彼女の家におじやますることはなかった。彼女の案内で近くのファミレスに向かう。夕暮れの訪れは早く、春とは言え少し肌寒い風が吹いていた。

若い男女が二人でお食事、と言うと聞こえはいいが、柏崎さんと交わした会話は相変わらず他愛もない内容で、ここで特段語るべきこともない。ハンバーグセットにドリンクバーを頼み、彼女も似たようなメニューを注文する。モーターを交換したことは伝えていたので、しきりにモーターの値段を聞いてきて、食事とは別にモーターの値段分として500円分のクオカードを渡してくれた。食事のあと、地理に不案内な僕をファミレスから駅まで送って、三駅分の乗車券を買うと彼女は深く頭を下げる。

「直してくれて本当にありがとうございます」

まるで大人のような丁寧な挨拶と、どこか他人行儀のしぐさに、感謝はあってもその他の感情はないことを改めて知る。

「それじゃあ、また明日」

午後8時を回ってはいたが、「夜遅く」と呼ぶには早い時刻に僕はひとりで電車に乗った。

結局僕の手元に残ったのは、彼女の携番だけでそれ以上の進展はなかった。

9時前に帰宅し、そこはかたなく安堵している母と、僕より少し早く帰宅し、柏崎さんの様子を母から聞いて純粹に修理したことに満足仕切っている父と、彼女と何の進展もなく落ち込んでいる僕と、一連の出来事には関係ないが会社の新人研修の辛さにくたくたになって帰宅した兄と、四者四様のまま、その日は終わって行った。

その後彼女から話しかけられることは無く、僕はまた押川と男二人でバスケット部の練習を見学する日々となっていた。

エントロピーは増加すると言うが、僕の部屋は三日で混沌と化す。あれ以来、体育館のギャラリーで彼女の姿を見ることも無く、どこか

らともなくテニス部に入部したと聞いた。

そして二か月が過ぎ、入部の機会を失った僕は未だ帰宅部。ゾイドさんまいで遊ぶほど幼くはないが、かといって動かさない訳でもなく、相変わらずライガーゼロやエレフアンダーを弄んでいた。

クラスの中では四月のどこかよそよそしい雰囲気など遠くに吹き飛び、気の置けない仲間も増えてくる。友達と呼べる女子も何人かでき(残念なことに飽くまで友達)、高校生活は着実に日程を刻んで行った。肝心の成績はというと、中学時代にサボったツケで、授業だけではとても勉強の内容についていくことなどできなかつた。

ただし、ひとつだけ興味を持った教科が数学だった。中学までなら、「直角三角形ABCの斜辺AB上を毎秒1cm移動する点X」を「移動するな!」文句を言いながら解いていた【軌跡】の問題が、高校になって円弧を描くようになる。計算式はより複雑となり、 $f(x)$ の「 f ってなんだよ!」とぼやきつつも、円弧が描く軌跡に既視感を覚えた。

「ゾイドの回転軸の運動……」

ライガーなどの四本足のゾイドですら、膝関節の三軸移動で回転を歩行に変換し、アイアンコングに至ってはナツクルウオークという擬似的な二足歩行に加え、頭部と背中のみサイランチャアの回転を再現している。無邪気にゾイドの動きを楽しんできたけれど、高校の数学を学ぶことでゾイドの回転運動に秘められた設計者の努力の一端を垣間見ることができるようになっていたのだ。

父親の書齋には高校、大学時代に使った参考書がいくつか残っていて、【軌跡】に関する資料も揃っている(隣には『ゴジラ』シリーズのVHSビデオが並んで、その隣に『ガンダム』の『ZZ』『逆シャア』まで全巻揃っていたけど)。

カージオイド、レムニススケート、アステロイド。

二次関数までしか知らなかった僕は、 y に乗数が付き、平方根と不等式が付属するグラフの描く図形を見て、自然、アイアンコングのナツクルウオークの軸線移動を連想していた。

彼女に僕が感謝されたとはいえ、結局アイアンコングを修理したの

は父親だ。決して偉ぶったりはしない父だが、あの一件で知識と技術力は僕とは雲泥の差なのを思い知らされた。

ゾイドの動きを観察すれば、もしかすると数学に共通する知識が得られるのではないか、そしてもし今度ゾイドが壊れたときには、正真正銘僕だけの力で直してあげられるんじゃないか。黄ばんだ父親の参考書を書架に戻すと、翌日僕はブックオフへ行つて（ゾイドを買うための節約術）100円均一になっているほぼ新品の『数ⅡB』、『数ⅢC』、『代数幾何』などの参考書を買ひ込み、わからないなりに【軌跡】や【三角関数】の回転などを主に勉強を始めるようになっていた。

テスト範囲と無関係な勉強だったので中間考査は散々な結果に終わる。ひとり寂しく落胆していたけど、テスト明け直後に今度はクラスマツチの準備と練習に突入させられていた。

ロングホームルーム
L H Rでクラス Tを^{Tシャツ}デザインすることになり、スヌーピーもどきやらデイズニーもどきやら、“努力” “根性” “勝利” みたいなクサイセリフを背中に貼り付けた凶案が黒板にマグネットに貼られた。その中でひとつだけ、僕の目が惹きつけられたデザインがあった。逆三角形の中心に、イナズマが描かれている。

（あれってまるで、ヘリック共和国とゼネバス帝国のマークのコラボじゃないか？）

選定に影響が出るので、デザインしたクラスメイトの名前は伏せられている。

もしかしたら柏崎さんか、とも思ったが、アイアンコングを「メカコング」と呼んでいたくらいだから、バトストにもゾイドのパッケージにも詳しいはずがない。

たぶん偶然の一致か、それとも僕以外に隠れゾイダーが潜んでいるのか？

とにかく多数決の挙手には、デイズニーもどきなんかより断然ゼネバス・ヘリック共同デザイン（※勝手に名付けた）を選んでいった。票が割れ、意外にも僕の好みのデザインが選ばれた。

担任が心のこもっていない「おめでとう」を言って、デザインした本人を指名する。

「柏崎さんのデザインに決定しました」

先生の拍手につられて、みんなが拍手する。そして僕は、拍手もせずには彼女の斜め後ろ顔（※席順の関係）を見つめる。

彼女は幾分ゾイドに関して学んだようだ。その証拠として、傍目にはわかりづらいが、5cmくらいの塩ビのアイアンコング（※新世紀版）が、ミサンガ状に編みこまれたカバーに包まれ、彼女の学生鞆からぶら下がっていたのだった。

⑤

なぜにクラスマッチとはこんなに燃えるのだろうか!?

高校になっていままさら運動会でもあるまいし、と思っていたのに、いざ実際に始まってみると、ゼネバス・ヘリック共同デザインを背負ったクラスメイトに大声援をおくっていた。

梅雨入り前の6月、晴れた陽射しは初夏を通り越して真夏の暑さだ。大縄飛びで筋肉痛、綱引きで筋肉痛、障害物競走で綱をくぐり損なって関節痛。いまだ帰宅部で身体が完全になまり切っていた僕は、本番でリミッターをはずし擦り傷だらけになっていた。

ちようどエリさんがスタートラインに立っている。女子五人でのムカデ競争の第一グループ、額の赤いハチマキからうつすら汗が流れている。

「がんばれよー!」

疲れと痛みのテンションMAXで叫ぶと、なんと、先頭の彼女は振り向いて手を振ってくれた。ほんのり日焼けし汗ばむ肌と、眩しい笑顔の破壊力は半端ない。疲れとは別の動悸が僕の胸を打った。

雷管の紫煙で女子五人の脚が飛び出す。ハーフパンツからすらりと伸びる、息の合った女子の白い脚運びに「コネクテス?」と連想するのがゾイダーたる由縁。折り返しの旗を回り、エリさんたちは順調に走る。一度だけ黄色のチームが追いつがって来たけれど、途中で急にペースが落ちて脱落し、そのまま彼女は第二走者グループにタスキを渡していた。

競技はうちのクラスの首位独走のまま最高点をもぎ取った。女子たちと一緒ににはしゃぐ彼女の姿は最高だった。

最終種目の全クラス対抗リレーでは僕も走ったが、詳しい説明は省略する。

閉会式、三年生に優勝は譲ったものの、最終成績は全学年での準優勝。全身筋肉痛でも心地よい疲労となって、高校最初のクラスマッチは幕を閉じた。

暑さが緩む西日を浴びながら、HRに向かう途中、優勝した三年生

クラスの女子の会話が聞こえてきた。

「あのムカデの一年生、ヒロシ先輩の兄妹だよね。気になって名前を調べたら、苗字が柏崎だったもん」

「やっぱり？ どこことなく顔つきが似てたけど。そーなんだー、ヒロシ先輩のねえ〜」

悪意は感じられないけど、思わせぶりなフリの会話だった。

ヒロシ「先輩」？ OBか？

「よおー、リレーご苦労ー」

そばだてようとした耳をつんざき、背後から押川が肩甲骨の中間を手のひらで叩いてきた。綱引きで伸び切った筋肉に鈍痛が奔る。イテーなーとぼやく僕の聴覚をさえぎって押川がまくしたてた。

「アンカーのお前の追い上げで、五位が二位になったじゃん、全然身体なまってねーないおい。お前のおかげお前のおかげ。だからさ、帰りに打ち上げやろうぜ、カラオケ。女子もさそってさ。来るだろ？」

ふとした間合いを読み取られる。そのあたり、腐れ縁の悪友である。

「柏崎さんも誘ってあるぜ。な、来るだろ」

当然参加を即答したので、三年生女子の会話を追うことはできなかった。

一応『素敵なサマーボーイ』を検索してみたが、なかった。

集まったのは23人。それぞれ都合があって、クラス全員は揃わなかったけれど、大部屋に入れるギリギリの人数だからよかったかも。それに一人が歌える回数はせいぜい1回か2回なのでちよつと気軽だ。暗めの照明の下、エリさんは僕のほぼ正面に座っていた。

座席順にタッチパネル式の検索機が回って来る。こんな時は『夜鷹の夢』を入れるようにしている（といっても、今回が初めて）。理由は隠れゾイダーをあぶり出すためと、『enemy of life』はイントロが長くて響き買いそうだから選ばなかった（『夜鷹の夢』のイントロって知ってる？）。

11番目に歌ったが反応無し、隠れゾイダーが皆無と判明。まあ、みんな検索機とカラオケ本とにらめっこしていて、他人の歌なんて聴

いていないんだけどね。

エリさんの出番は22番目だった。一瞬、視線が僕に向けられた気がして、画面に映ったタイトルに目を見張った。

☒急に泣き出した空に 声をあげ はしゃぐ無垢な子どもたち
……

『Wild Flowers』だ！

彼女は、更にゾイドの知識を充実させていたのだ。

冒頭のアコースティックギターにのせた、オリジナルでは聴けない女子ボーカルの歌は、ゾイドファンではなくとも心に響く。透き通った声は雑然としたカラオケボックスの中でも心に染み渡った。それまで気付かなかったけど、マイクを持つ右手首には、鞆にぶら下げている、ミサンガ編みに包まれたアイアンコングが揺れていた。

万雷の拍手（に感じた）を受け、ほどよく紅潮したエリさんがマイクを次の女子に渡している。「アニメの曲？」「うん、最近聞いて知ったの。いい曲だったから」みたいな会話があったが、男子ならともかく女子には1999年のアニメはわからなかったようだ。

青少年健全なんとかカントカ条例のせいで、僕たちは各自一曲歌っただけで打ち上げはお開きとなった。女子グループにすっかり馴染んだエリさんとは一言も言葉を交わせないままお別れである（「じゃあね」だけは言えた、但し 男子多数・女子多数 だったけど）。それでも何度か視線が送られていた感触があって、明日以降に希望が湧いてくる。偶然帰る方向が同じ参加者がいなくて、僕はひとりぼっちで上り電車のドアの閉まる音を聞いたのだった。

九時半を回った電車の車内は帰宅するサラリーマンの姿もまばらで、僕は車窓の夜景を眺めながら、彼女の『Wild Flowers』の歌声を無限に再生し続けていた。

またゾイドをきっかけに話せばいいな。

あのアイアンコングMk-IIは健在かな。

女の子の部屋に飾ってあるゾイドって、どんな雰囲気なんだろう。

暴走しないまでの妄想が、住宅地の街灯に重なって流れていった。

玄関開けたらスーツ姿の兄が伸びていた。地元の安定企業に就職

した筈なんだけど、どうやら聞くと見るとは大違いで、実際は限りなくブラックに近い会社だったらしい。

入社以来連続で無給の残業、仕事終わりにはくたくたになって帰宅、週末は上司との付き合いの飲み会と、どちらかと言えば体力のある兄も、社会人一年目の洗礼をもろに喰らっていた。五月病は発症しなかったようだが、梅雨入り前で猛暑の六月になって更に生気を失いつつある。入社以来、まともに会話をしていなかった。

「こんなところで寝ないでくれよ」とうつ伏せになった背中を揺さぶりながら、ふとあの三年生女子たちの会話を思い出した。高校OBの兄なら、もしかすると何か知っているのではないかと。

「ん……あきらるか。どうした、もう朝か」

風呂入れよ。ビール臭いし煙草臭い。これが社会人の生活なのかと思うと、将来気が重くなる。それは置いといて、僕は抱いた疑問をぶつけてみた。

「あのさあ、兄貴の高校の時、柏崎という同級生が先輩はいなかった？」

「……柏崎？……中越地震で火災が発生した原子力発電所の事か？」
混濁して非常にマニアックな勘違いをしてくれる。いや、決して間違ではないのだが。この辺り、技術畑の父親の影響だろう。一応確認するが、それは柏崎刈羽原発だ。

二三度頭を振って、混濁の記憶を整えているようだった。大あくびの後、兄は聞き取りづらい声で呟いた。

「ああ、あの柏崎先輩ね。バスケットの名プレイヤーでうちの地区大会二連覇の立役者だったなあ。

だけど先輩が抜けてからバスケット部の凋落がはじまって、それからはいせいで市内大会優勝止まり。突然転校したから、別れの色紙も渡せなかった」

昼間の三年生女子の会話に繋がった！ ビールと煙草臭さに耐えながら、僕は食い下がる。

「何かほか知らないの、例えばその先輩の妹の事とか」

「思い出せないなあ……あ、ただ柏崎先輩も好きだったぞ、ゾイド」

僕の中で閃光が奔った。エリさんとゾイドとの繋がりが見えてきた。

兄はようやく半身を起こし、頭を抱え俯きながらも続けてくれた。「俺がラノベからゾイドに入ったのも、柏崎先輩の影響だな。バトストっていう奴に嵌ったのも、先輩の紹介だ。なんでも幾つか貴重なゾイドを持っていた……ゴジュラス・ザ・オーガノイドだっけ？」

微妙に間違えているが、さすがに兄がアイアンコングとゴジュラスを間違えるとは思えない。察するに、柏崎「ヒロシ」という彼女の兄は、貴重なジ・オーガと「アイアンコング MK-II 限定版」を両方とも持っていたとも推測できる。もしかすると、ジ・オーガのゴジュラスだって、貴重な「MK-II 限定版」の可能性だってある。前に僕が予想した推論。

- ①；あのゾイドは父親の形見。
- ②；あのゾイドは弟、若しくは兄の形見。
- ③；あのゾイドは別れた彼氏が好きだった思い出の品の「②」に相当する結論が導かれた。スゴいぞオレ。

引き続き兄貴から情報を仕入れたかったのだが、「今晚はこれ以上メモリーを読み込めない。有益なデータがあれば呼び出しておく。悪いがもう休む」と告げると、再び兄は玄関で高いびきをかいていた。眠気と疲労と翌朝の出勤を配慮し、話は打ち切りにした。お疲れさん……てか、せめて寝る前に歯を磨け。

僕は兄を起こすのを断念し、その場をそつと立ち去った。まもなく玄関から母親の金切り声が響き渡ったのは言うまでもない。

趣味の数学研究は続いていた。

マクローリン展開からのオイラーの公式の導き(『数学〇ール』って知ってる?)、ネイピア数の存在に、積分で回転体を求める計算式からの円錐の体積を求める際の係数 $1/3$ の意味、同様に球の体積での係数 $4/3$ の意味など、丸暗記に頼ってきたこれまでの「勉強」とは大きく違ってきていた。クラスマッチが終わってわずか二週間での期末考査は、暗記科目の世界史や生物の成績が相変わらず散々だったけど、数学Iだけは平均を上回る点数を得られた。合計点数では平均並

みななので、特段に注目されることもなかったし、注目されることも望んでなかった。ひとりだけ、注目してほしい女子はいたけど、調査もあつて進展らしい進展もなかったのだった。

「吉山、お前夏休みの予定はたったのか？」

いつも唐突に絡んでくるのが悪友だ。だいたい押川の場合「夏休みの旅行を女子と一緒に行く」なんて計画を持ちかけてくるものだ。

「女子と一緒に旅行に行く計画があるんだが、柏崎さんもだぜ」

ト定番だった。

詳細はぼんやりと聞いたが、簡単に言えばみんなで鎌倉へ行き、鶴岡八幡宮から市内の寺社などを巡り、一泊して江の島で海水浴をして帰るといふもの。文芸同好会の顧問の先生が一人同伴する、企画自体は文芸同好会のもの、部外者でも希望者は実費での参加を許可されている。正式な部活動に昇進していないことがかえって自由だった。

テニス部のエリさんが参加する理由とは、仲良くなった同好会の女子部員（同好員？）の、1年生参加者が一人しかいなくて、どうしてもお願いされたからだそう。

鎌倉か。一度家族で行ったことはあるが小学校低学年の頃だ。正直鎌倉にも文芸にもあまり興味はないが、彼女には興味がある。

「行くか、鎌倉にも文芸にも興味があるし」

これほど夏休みが待ち遠しいのは、学生生活で初めてだった。

僕の夏は目の前だった。

⑥

2コマ短縮授業をしてからの大掃除、体育館で終業式、LHRで通知票を受け取り、帰りの挨拶を終えると正午を少しまわっていた。

高校で受け取る通知票は、小中学校の時の厚紙と違って味気ない。A4サイズのコピー用紙に印刷された、担任の印鑑が押してあるペラペラの一枚だけ。どうせ同じものが保護者宛に郵送されているから〇び太君みたいに隠したって意味がない。

数学と体育が「4」、あとはオール3という面白みのない成績で、帰宅して母親に見せても「ふーん」と言っただけで興味なさ気にキッチンのテーブルの上に置かれてしまった。

ことわざに「末は博士か大臣か」とあるけど、高校生になり、そして兄の実情を知っている親の身からしてみれば、我が子の限界などもうとつくに達観していたに違いない。

話は前後するけど、まず帰宅「後」の話から。

無造作に置かれた通知票の下に、これまた無造作に置かれたチラシがあった。

「大強度、粒子加速器、一般公開、見学会？」

タイトル長い。ラノベかよ。

「夏休みに合わせて、今度お父さんが作ってる施設の公開をするんだって。あなたも少しは興味があるんじゃないかってチラシ持ってきてくれたのよ」

と、母親は語尾を下げながら告げる(忘れているかも知れませんが、僕の父親は高度な技術職に就いて居ります。詳しくは③参照です)。

アクセラレーター
粒子加速器。

漠然とした知識しかないが、素粒子という原子分子を構成する小さな小さな粒子を荷電し加速して衝突させ、物質の構成のおおもとを調べる装置、らしい。前に父親がデスザウラーの荷電粒子砲の原理について散々文句を言っていた理由もこれである。

「建築が進むと、装置の内側は閉められちゃって、永遠に見学できなくなるんだって。だから大きな電磁石とか、その、ナントか言うつぶつ

ぶが動き回るパイプみたいなところを見学できるラストチャンスなんだって」

チラシの日付を確認すると八月末の公開だった。母親は「パイプ」と言っているけど、たぶん粒子加速器の長いリング部分のことで、その周辺通路を通電前に見学するため、暑さ知らず頃のギリギリ夏休みの終わりに企画を持ってきたのだろう。

興味はあった。中二病っぽいけど、シュレディンガーの猫の仮想実験はネット検索しても全然わからないのに知ったつもりになっていたし、なにより粒子加速器とはゾイド界隈の最強武器である『荷電粒子砲』の基本原理であるはずだ。そんな自分を満足させるためにも、施設見学はしたいと感じた。

「考えておく。父さんには僕から話すよ」と言って、念のためにチラシを勉強机のライガーゼロの足の下に挟む。

けれどその前に待ち望んだイベントが控えていた。

以下、前後した話の、時系列的に「前」の話題である。

その日は文芸部での参加者ミーティングがあった。待ち合わせ場所は、偶然にもあの時彼女と一緒に夕食を食べた、学校からひと駅先のファミレスだった。

放課直後の教室で、成績表やら夏のプリントやらを無造作に鞆に放り込み、僕は手のひらに汗を握りながら立ち上がった。進行方向には、赤いスマホを操作する彼女の姿がある。

(自然に、ごく自然に)

背後に押川の視線を感じる。

せっかく、ひと駅先まで一緒に行く大義名分はあるのだ。いつもの様に悪友に間が悪く邪魔されないよう事前に念押しをしておき、彼女への声がけにチャレンジした。

「これから文芸部のミーティングだね。一緒に行きませんか？」
「うん、いいよ」

※脚注：「一緒に行きませんか？」はねーだろー、と後ほど押川殿に散々バカにされました。

スマホ画面から目を上げての即答だった。

「私もちようど吉山君たちを誘おうと思っていたの」

時折、考えることを通り越して状況が進む場合があるけど、これだ二回目。

「押川君と一緒にいていつも忙しそうだったから。だから今日は声をかけてくれてありがと」

意図せず小首を傾げる仕草が無性に可愛らしかった。

※脚注：話しかけてもらえなかった原因はオマエか！と、後ほど押川殿に散々文句を申し上げました。

話題が膨らむ。

「アイアンコング、いまでも元気だよ」

MK-IIの動画が、差し出したスマホの待ち受けに流れていた。

「本当に感謝してるの。でも、何度も言うのってちよつと恥ずかしくって」

口元を隠す赤いスマホに指の白さが映える。

「あれから家にあったビデオを見直してみたの。古いテープだから大変だったけど、『ゾイド』がどんなものかだんだんわかってきたんだ。大人でも夢中になるのもわかった」

そして少しだけ会話が途切れ、

「鎌倉、楽しみだね」

と言って、微笑んでくれた。

これを至福の刻と言わずして、ほかに何と表現できようか！

自然体を意識しなければならぬ手前上、「昇降口で待ってる」とだけ告げて、はやる心を抑えながら教室を出ていた。教室を出なければ、紅潮してだらしくゆるんだ顔を見られてしまうからでもある。爆発しそうな喜びをこらえるため、廊下で悪友の背中を思い切り何度もひっぱっていた。

僕と押川、エリさんとエリさんを誘った同じクラスの泊さんの4人になって校門を出た。泊彩香とまりあやかさん、僕と同じ駅から通学していることだけは知っていたけど、これまで接点が少なくてほとんど言葉を交わしたことはなかった。目立った印象はなかったが、接してみると『典型的な文学少女』とは若干違っていた。

「よろしくお願ひします！　ところで作家はどなたが好きですか？
そしてお気に入りの作品って何ですか？」

直観的に僕と同じ匂いを嗅ぎ取る。ロイ・ジー・トーマスとか、ト
ミー・ミューラーとか言えるわけもなく、とりあえず「太宰治」と答
えると

「鎌倉と太宰と言えば『右大臣実朝』ですね！　個人的には太宰はどの
作品がお好きですか？」

捲し立てる口調で自分の好きなものに関して食いついてくる。い
わゆる文学マニア、端的にいつて「オタク」の匂いなのだ。もちろ
ん、この時点での僕の太宰は露骨な知ったかぶり。とりあえず『走れ
メロス』と「生まれてこなくてスイマセン」のフレーズしか脳裏に浮
かんで来ないレベル。それから改札を通り、ホームで電車を待ち、一
区間の乗車中も、泊さんは延々と文学談義を続けた。

一応文芸部の合宿に参加する以上、門外漢であることを公言するの
もぼつが悪いので、東野圭吾とか、村上春樹とか、聞き覚えのある作
家の名前が出るたびに、「うんうん」とか「えーっ、そーなんだー」と
か適当に相槌をいれてしまったため、泊さんの文学談義に歯止めが効
かなくなつたようだ。エリさんはもう馴れているらしく、相変わらず
微笑んでいる。せつかくいつしよの電車なのに、またも僕は彼女との
会話の機会を奪われてしまつていた。

いつも早弁をしている上に、エリさんといっしょに移動できた緊張
と、泊さんの文学談義のせいで、午後1時近くに座席に着いた時には
かなり空腹になつていた。参加メンバーは半分くらい揃つていて、と
りあえず注文した主食が届くまでにドリンクバーの甘い液体を流し
込む。

「お待たせ致しました。これで参加者全員揃いましたので、始めさせ
て頂きます」

僕らが到着して十数分後、文芸部部長の鈴木さん（先輩）が、高校
生とは思えないくらいに穏和で丁寧な口調で切り出した。

「最初にお礼申し上げます。私たちの都合で少し遠い場所での打ち合
わせになつてしまい、お手数おかけしました」

旅のしおりみたいな中綴じA5サイズの冊子が配られる。3年生の参加者は部長のほか男女1人ずつの計3名。2年生が男女2人ずつの4人。で、1年生の僕たち4人の、合計11人だった。顧問の先生は今はいない。授業はないけれど午後も業務はあるわけで、ここに来られないのだ。

軽くお互いに自己紹介はしたけれど、一回ぐらいで人の顔と名前を覚えられるわけがない（詳しくは②を参照）。

冊子の内容説明を上の方で聞きながら、僕は冊子越しにちらちらと彼女の姿に視線を送っていた。彼女の学生鞄には、相変わらずアイアンコングのスウィングがぶら下がっている。穏やかな表情で説明を聴く彼女の顔は、さっきの「鎌倉、楽しみだね」の時と同じく、本当に輝いて見えた。

少し気になったのは、そのあと僅かな間合いがあったこと。もしかすると、僕の兄から聞いた、エリさんのお兄さんのことと何か関係があるのかもしれない。

彼女はゾイドのアニメを「古いテープ」の「ビデオで見直した」と言っていた。『Wild Flowers』を歌っているので、そのアニメはいわゆる「無印」ゾイドに違いない。つまり僕より4歳上の「ヒロシ先輩」のビデオを彼女が視聴しているとも考えられる。

思い出の詰まったビデオテープを再生する彼女はいったいどんな気持ちなんだろう。もしかすると、あまりこちらからゾイドに関する話題は振るべきではないのかも……などと、勝手な想像が次々と浮かんでしまっていた。

「……以上が大凡の行程ですが、何か質問がある方はいらっしゃいますか」

雑然とした質疑応答が繰り返された。その内訳には泊さんの文学語りと鈴木部長との丁丁発止の遣り取りも含まれていた気がするが、興味がないので覚えていない。

エリさんと一緒に帰ってきたが彼女の家はこの近くなのでファミレスでお別れ。泊さんとはそれからまた3区間分、延々と文学談義を聞かされる羽目になった（僕と同じ駅）。ついでだが、押川は自転車

通なので一区間で降りたため難を逃れていた。

出発は、三日後だった。

三日後、朝5：45集合で6：05発の電車。僕は母親に頼らず起床し、早々に家を出た。

「おはようございます、相沢先生」

「おはようございます、吉山さん」

顧問の相沢先生は大卒新採で本校二年目（と鈴木さんがファミレスで説明していた）。国語が担当教科の女性教師とは知っているが、三年生担当なので直接授業を受けたことはない。紫外線対策らしくつば広の白い帽子をかぶり、飾り気のないポロシャツに薄手の上着を羽織っている。ちよつと目に現役女子大生に見えそうだが、手にしたボードに挟んだ冊子（例の旅のしおり）が「先生です！」という空気を放っていた。

「おはよ」

振り向けば、彼女が居た。

一本にまとめた髪に、薄いブルーの中袖ブラウスと膝頭が見えるデニム地のハーフパンツ姿で、小さ目のショルダーバッグにはやはりアイアンコングが揺れている。袖のリボンと髪留めのリボンの水色がお揃いで、あのと僕の家にはMk-IIを運び込んだ服装とは大違이었다。

僕の脳内で、インストレーションシステムコールが鳴り響く。

女子って、こんなに変わるものなんだ。

今日は暑くなりそうだ。

⑦

長谷寺の眺望台に到着したころには、みんながみんな汗だくになっていた。

満開の時期を過ぎた紫陽花の葉の向こうに、白浪が寄せる由比ヶ浜が広がる。記憶と言うのは曖昧で、確かに家族とこの景色を見たはずなのに全く覚えていない。それとも、一緒に見ているひとが違うから違った景色に見えるのだろうか……などと脳内で自問自答のヨタ話をループさせたりしていた。

予想はしていたがとにかく暑い。持ってきた水筒の水を飲み干し、遊歩道入り口の自販機の500ミリペットボトルを秒で飲んでも一向に暑さが緩む感覚はない。

彼女はいつの間にかバイザーをつけ、眺望台で汗ばむ額を拭い海風に髪と水色リボンをなびかせていた。うっすらとかいた汗にブラウスが地が貼りつき、テニス焼けの肌が透けて見える。僕は心身ともに、夏を実感していた。

なにかでっかい金色の仏像をみて、なにかでっかい回転体があった覚えはあるけど、それが何かは覚えていない。一方、インドア派と思えた泊さんはやたら元気だ。

「経蔵って、今は回せなくなっちゃたんですね、残念。十一面観音すごかった。全高約9mもあるそうです」

9mといえばゴドスの頭頂高、意外に大きい。

高德院の大仏拝観で内部を見ても「あ、FRPで補強されてる」とか「大仏の背中窓って、ウエポンベイ開放、からのミサイル発射に似ている。デススティングアの試作版がFB2に掲載されていたな」などと罰当たりな発想しか湧いてこなかった。

山門前の店でコロッケを食べる予定だったが、とても温かいものなんか食べる気がせずむらさき芋ソフトクリームを頬張るものの、甘さのせいで余計に喉が渇く感じがした。

大仏から鎌倉文学館までの道のりを、

「鎌倉は散策してこそそのものー」

との鈴木さん（先輩）の提言により、汗ダラダラで僕らは歩く。押川と連れ立って歩くその先から、エリさんと元気いっぱいの泊さんとの会話が聞こえてきた。

「絵梨は誰が好きなの？」

いきなりの恋バナに思わず耳を敬てる。

「やっぱり宮沢賢治かな。お母さんの本棚にあったものを読んだくらいだから、そんなに詳しいわけじゃないけど」

……お約束の展開でした。でも、宮沢賢治が好きというのは初耳で、彼女の趣味の一端を知ることができただけでも収穫だ。泊さんとの会話は続く。

「お気に入り作品って何？」

『櫓ノ木大学士の野宿』って知ってる？」

「ああ、あれね。幻想的で不思議な作品だったなー」

「ならのきだいがくしののじゆく」？ てつきり、『銀河鉄道』とか『注文レストラン』などの有名作品を想像していたが、「そんなに詳しいわけじゃない」と言う割には意外だった。文学少女の泊さんは、その『ならのき大学』の内容を知っているのだろう。ところが、「ううん。ブロントサウルスが好きなの」

と、意外な方向へ展開した。女子の口から「ブロントサウルス」の言葉が出るのも意外だが、宮沢賢治の作品に恐竜が登場するなんて知らなかった。

僕は勝手に、「恐竜好きなお兄さんがゾイドも好きになり、それでエリさんもゾイドに興味を持ったのか」と想像する。ゾイダーは恐竜との親和性が高く、多分に漏れず僕も恐竜は大好きだ。なんとか話に入り込もうとしたとき。

「暑かったでしょう、ごくろうさま。部長さん、チケットを買っておいだからみんなに渡してね」

歴史を感じる洋館の前で、白い帽子の相沢先生が待っていた。

先生は、鎌倉の寺院散策は学生時代に散々やっていて、暑さも紫外線も避けたいので駅から直行で一足先にここに到着していたのだ。

即座に泊さんの標的は変更され、チケットを受け取ると一目散に文

学館の中に早足で入っていく。結局ブロントサウルスの続きは聞けず仕舞いとなってしまう。

所詮、付け焼き刃で文学は語れるものではない。展示の直筆書を「ダイブツ次郎」と読んだ時点ではまだ失笑で済んだが、うっかり「川端コウセイの直筆手紙？」と発声したとたん全員にドン引きされてしまった。

文学館に面した庭園の日陰のベンチで、僕は押川と二人で呆然と缶ジュースを飲んでいた。

「俺たちなにしに来たんだけ」

「……もちろん、鎌倉の歴史と文化を学ぶためだろ」

「ああ……歴史と文化、だよなあ」

自分たちがひどく場違いであることに、いまさら思い知っていた。そしてそれとは別に、脳内でリピートしていたこと。

(エリさんは、ブロントサウルスIIアパトサウルスが好き)

ゾイドに続き、会話の大きなきっかけを見つけたことでジワジワと喜びがこみ上げてくる。しかし彼女もまた泊さんに引っぱり回されるかたちで話す機会も見つからず、ただただ時間が過ぎ、チャンスが巡って来るのを待つしかなかった。

その後も幾つかお寺や神社でお金を洗ったりしたが、どこへ行ったか覚えていない。小町通りの買い物も、雑踏に紛れ彼女を見失い、押川といっしょにラーメンを食べて、集合場所の鎌倉駅に戻っただけ。夏至近くの暮れない太陽がようやく西に傾く頃、江ノ電に揺られ今晩の宿へと向かった。到着したのは、ビジネスホテルみたいな安宿だった。

各部屋に別れる前、ロビーで明日の打ち合わせをする。

「明日は海水浴するけど、くれぐれもトラブルを起こさないように。もちろん貴重品の管理も徹底してください。一応海の家のためには予約してあるけど、海岸で迷ったりしないように。万が一事故が起こったら、同好会とはいえ生徒指導部で問題になって二度と……」

お立場はお察し致します。でも、相沢先生の注意なんて、疲れ切ったあたまで完全に右から左で、早く部屋に行つて風呂に入りたい気

分だった。

ツインの部屋で、流れるに僕は押川との相部屋になる。修学旅行みたいになしつかりとしたイベントではないので、食事も各自が準備しなければならぬ。手っ取り早く、近くのコンビニに買いに行くこともできるし、ファミレスもあった。

「わりの、俺ハラ減ってねえや」

だろうな。何せ小町通りでラーメン食べたあとに豚まん食って、ホットドック食って、団子食って、デザートのカレープ食っていたから。その時の僕には到底付き合うことなどできず、悪友の食べ歩きを呆然と見るだけで満腹になってしまった。

さすがに夕方になって空腹になり、飲み物なんかも買ったので、ひとりで近くのコンビニに行こうとしてエレベーターを待っていた。

「あ」

開いたエレベーターの中に、中袖ブラウスに白のパーカーを羽織った彼女が乗っていた。彼女もひとりだった。

「全然会わなかったね」

「ひと、多かったからね」

まずは差しさわりのない会話をする。

「彩香は文学散策ではしやぎ過ぎたみたい。もう寝ちやつてる」

シチュエーションは僕と似たようなもので、彼女はコンビニに夕食と、明日の朝食を買い出しに行こうとして、僕と一緒に来たのだ。

エレベーターを降りて、ホテルの小さなエントランスを出ると、見慣れた看板が光っていた。

「あのファミレスって、ここにもチェーン店があるんだね」

ここで勇気を出さなければ、きつと一生後悔する。今ならリッツ・ルンシュテッドの気持ちかわかる。

「あそこでご飯食べようか」

「うん」

脳内で、僕はデスステインガーをレーザーブレードで突き刺したように絶叫した。彼女ともう一度二人になれるチャンス勝ち取った

のだ。内に秘めた興奮を抑え、僕たちは見慣れた看板のファミレスへと歩いていくのだった。

当然と言えば当然だけど、内装は彼女の家の近くの店舗とほぼ同じ。もしも、これが初めての会食だったら緊張して注文すらできなかったかもしれない。けれどこの店（の別店舗）での食事は二度目なのでプレッシャーは少ない。

サーバの並びもいっしょのドリンクバーで、僕はやたらと渴く喉を癒すように立て続けにコップ三杯の炭酸を飲み干す。彼女はというと、レモングラスの茶葉が透明なティーポットをほんのりと黄緑色に染まるのをゆっくり見つめていた。ほどよく色付いた紅茶をカップに注ぎ、注文した料理が来るのを待つ。

「太宰について、なにか興味ある展示は見つかった？」

一瞬ポカンとして、あつ、と思い出した。僕は「太宰治が好き」という設定をすっかり忘れていた。もしかすると、例の文学館に何か貴重な展示物があったかもしれないのに気付かずスルーしたのだろうか。

数秒ほど天井絵を見上げ考え込むと、「やっぱりね」と彼女がささやく。彼女を見ると、少し下を向き笑いをこらえていた。

「彩香がね、〴〵吉山君、太宰のファンって言ったのに、鶴岡八幡宮の階段のイチョウの前を立ち止まりもせず就上つていくのって、おかしくない？」って、教えてくれたの。これの意味判る？」

「ごめんなさい。全然わかりません。」

「気にしないでね。たぶんそんなことだろうと思っていたから。だって吉山君、学校で文学のカケラだつて感じたことなかったから。でも鎌倉で遊ぶのが楽しみなのは本当だから、それでいいと思う」

お見通しだったというわけですか。

僕は苦笑いをして、彼女も笑っていた。夜景をバックに浮かび上がる彼女の顔はよけいに白く、透き通って見えた。

こんな笑顔もできるんだ。

思っていた以上に、どうやら僕たちの距離は近くなっていたのだろう。だからもう一度勇気を出して聞いてみた。

「好きなの？ ブロントサウルス」

「聞こえちゃったんだ。そう、『ブロントサウルス』。言葉の響きが好きなんだ」

彼女はティーカップの表面を見つめ、そして店の外の夜景に視線を移す。

「でもね、今は『アパトサウルス』って呼ぶのが正しいって聞いて、ちよつとがっかりしてる。『ブロントサウルス』はブロントサウルスでいいのに」

『女の子はミステリアス』と聞いたことがあるけど、まさにいま自分が直面している。偏見かもしれないけれど、やっぱり女子からこんな恐竜の話がされるのは正直珍しいと思う。彼女はアイアンキングMK―IIのことを『思い出だから……』と言っただけで詳しい理由は答えにくくもない。それはそれとして、せつかく近づいた距離だ。少しでも壁は取り除いておきたい。

「なにかブロントサウルスに思い出でもあるの？」

いつものように自然を装って聞いてみた。

彼女は視線を夜景から僕に戻す。

笑顔が少し、淋しげに見えた。

「吉山君といると、なんだか安心しちゃって余計な話になっちゃう。

ほかのひとには言わないでね、押川くんにもだよ」

うんうん、と僕はオーバリアクション気味に肯く。

「お母さんが、好きなんだ。『ブロントサウルス』の歌が」

「またですか！（※『女の子はミステリアス』という件についての、また、です）」

『ブロントサウルス』の歌なんてあるの!？」

☒ブロントさんブロントさん お首が長いのね そーよ 母さんも長いのよー

とかいうアホな歌詞が浮かんできた。

「『レベツカ』って知ってる。子どもの頃、よくお母さんがアルバムを聴いていたんだ。」

同情とかしてもらうつもりもないけど、言っておくね。

私のお母さん、死んじゃったんだ」

さっきのアホで脳天気な歌詞から一転して、重い気分に含まれる。笑顔が淋しく見えた理由はそれだったのか。それでも彼女自身から語ってくれたことなので、気持ちの整理は付いているようで落ち込んでいる様子は見られない。

ただそこを掘り下げて聞き出すほど、僕のデリカシーは欠如していない。

タイミングよく、注文した料理が運ばれてきた。

「まず食べちゃおうか」

「そだね」

彼女はパスタを、僕はハンバーグセットを（今回も）食べながら、明日の予定とか、夏休みの課題とか差し障りのない話題を続けていった。

ハンバーグを細かく刻みながら考え続ける。できることならまたこうして会ってみたい。でも遊園地とか映画とかじゃ、まるでデートみたいで下心ミエミエになってしまう。何か別の、露骨なデートではなく、それでいてデートみたいなイベントがないか考えて、ふとあの日キッチンでみたチラシが思い浮かんだのだ。

「ねえ、荷電粒子砲の原理って、興味ある？」

「荷電粒子砲、ジェノザウラーの？」

はい、きました。リアル女子に「荷電粒子砲」と「ジェノザウラー」のパワーワードを言わせたオレ、最強じゃないですか！

「父親が勤めている粒子加速器の施設で、夏休みの終わり頃に一般見学会があるんだ。よかつたら一緒に行かない？」

「うん、興味ある。行きたい」

脳内ガッツポーズ。泊さん、押川様、脱落してくれて本当に感謝しています。

詳しい日程や場所などは、家に帰ってから連絡すると告げると

「じゃあ、アドレス交換しよっか」

携番とアドレスゲット。もう多くは語りません。

あまり遅くなると相沢先生に怒られるので、僕らは長居せずにファ

ミレスを出た。

エレベーターを先に降りたとき

「あした一緒に泳ごうね」

と手を振ってくれた。

部屋に戻り、高いびきを上げる押川をひっぱたくこともできないので、僕は乙女のごとく枕パンチを何度も繰り返していた。

結論から言うと、海水浴は中止になった。

「東海から関東にかけて広く張り出した低気圧の前線に伴う発達した雨雲が、局地的に強い雨を降らせるでしょう」の、「局地」が鎌倉市で、朝7時くらいからどんよりとした雲がかかり、それからすぐバケツをひっくり返したような豪雨が僕らの泊まったビジネスホテル周辺に降り出したのだ。

「せめて江ノ島水族館くらいは行きたかったのにねえ」

社交辞令などではなく、柏木先生も本当に残念そうで、もちろん僕たちも残念だった。

彼女の水着姿が見られない、のも残念だったが、現実でアニメの水着回みたいに刺激的な格好をするはずもないので、単純に無邪気に彼女と海で遊びたかったという残念さの方が大きかった。(昨夜の白のパーカーは、間違いなく水着の上に着るためのもの、紫外線よけを含め安易にクラスメートなんかに肌を晒さない魂胆があったのは明白。それに「文字列で水着姿を表現しても嬉しくないだろう」とか考えてる著者の手抜き、などというメタな勘ぐりは無用)

ただ一晩過ぎてみて、無邪気には成り切れない幾つかの心のひっかかりが生まれていた。

母親を失っていたというカミングアウトもそうだが、「ヒロシ」というエリさんのお兄さんの存在についてもまだ謎だ。もしかすると複雑な家庭環境で、あの日自宅アパートまで案内してくれなかった理由もそのあたりにあるのかもしれない。それと「レベッカ」の「ブロントサウルス」という歌が気になっているが、僕のガラ携では容量不足で満足に検索できないので、むしろ早く家に帰ってパソコンで動画を調べたかった。

日程を大幅に切り上げ江ノ電鎌倉駅に到着。そしてJR線に乗り換える途中で完全にずぶ濡れになった。コンビニで買ったビニール傘はあったけど、そんなものは役にも立たないほどの豪雨だったのだ。彼女にしても状況は同じで、羽織った白のパーカーの下、濃い

めのサーモンピンクのシャツが透けるぐらいまでぐしよ濡れになり、ぴったりと身体のラインが表れ、ちよつとドキツとした。一方、一緒に歩いている泊さんは、全身を覆う透明なビニール合羽を着て悠々としている。

(絶対インドア派じゃない、文学の聖地巡礼をしているんだ)

僕は自分の認識の甘さをしみじみ感じた。

ガンガン冷房が効いたJR線の車内は、快適を通り越して濡れた服には寒すぎるほどで、彼女は取り出したタオルをマフラーのように首にかけ、鈴木さん(先輩)たちと相変わらず文学談義にふける泊さんの様子を眺めている。眺めながら、時折「クシユン」と小さくしゃみをする。強冷房車両で服が乾くのは助かるけど寒すぎて、彼女の体調が心配になった。

「なんかいいことあったのかよ」

唐突に押川が、僕のみぞおちをひじてグリグリと差し込んでくる。この悪友は、時々鋭い洞察をする。きつと僕の表情に、夏休みの末に粒子加速器見学の約束を取り付けた喜びが漏れ出しているのを察知したのでだろう。

「なんにもねーよ」と言ったところで、そのわずかな口調のイントネーションから、疑念を更に強めたようだ。そーかそーか、なんにもないんだなー、と言いつつ、ほとんど信じていない様子でとりあえず追求をやめた。

車窓には、横殴りの雨が真横になって流れを描いていく。降りる駅になり、相変わらず小さくしゃみ続ける彼女は、別れ際に「じゃあ、また」と手を振ってくれた。(それを見た押川が、再び無言で、それも強烈にみぞおちをグリグリしてきた。痛かった)

いろいろあったが終わってみればあつというまの文芸部研修旅行だった。僕が降りる駅に着いたころ、雨は傘がいらなくらいの小降りになっていた。

自宅に戻ってネット動画を検索し、「レベッカ」の「ブロントサウルス」のアルバムと歌の動画を探して聴いてみた。

甲高い独特のボーカルと、90年代風のポップな音色が特徴的で、

サビで繰り返される歌詞は「ブロントザウルス」と濁音がついた発音に聞こえる。ひとりぼっちとなった恐竜が、いつまでも遊んでいたいと叫ぶ歌詞だが、特にもの悲しいわけでもなく、郷愁を誘うような曲でもなく、単純にエリさんの母親が好きだっただけなんじゃないか、としか想像できなかつた。

ところで、いつまでも旅行の思い出に浸ってはいられない。夏休みとなれば宿題、休み明けの初日に実力テストがあり、テスト範囲準備の薄い本(せめてこんな表現をして、楽しい気分にならせてください)が配布されていた。主要五教科の教育業者のワークで(ベ〇ツセのバカ)、新学期早々に提出しなければならぬ。

好きな数学をまず解いて、少しは興味を持った現代文・古典を終え、現代社会に取り掛かり、3ページ目の問題で

「ジェンダー、って何?」

と思わず声にだしてしまった。ニクシー基地を守り抜いた象型ゾイド? それともアイアンウイングと呼ばれる大型飛行ゾイド?

男女の社会的性差。性別とは別の社会的役割。「女らしい」とか、「女のくせに」とか言うのが差別にあたり、そんな差別をなくすようなジェンダーフリーな社会を目指す、なんてことが薄い本(この表現好き)に書かれていた。

まあ、言ってることはわかるけどね。

でも「女のくせに」っていうと大騒ぎするのに「男のくせに!」って言うのはアリなんだよね。なんかキレイごとじゃん。

でも実力テストのためには機械的に覚えるほかないよね、と、自分を納得させる。

あまり早めに終わらせてしまうと、テスト範囲を忘れてしまうのでまとめの総合問題を残しておいた。部活動がないので多少のんびりと過ごせるというのもあるが、もう一つ理由は「今度はエリさんと図書館で一緒に宿題できないかな。そして勉強帰りの午後プールに行つて、鎌倉で見られなかった水着姿になってくれないかなあ」などと妄想していたからだ。けれども「男のくせに」誘う勇気が湧かず丸一日悶々と過ごす間、僕はメールを送る重要なきっかけがあることを

思い出した。

八月末の『大強度粒子加速器一般公開見学会』の詳しい日程を伝えねば。ついでに彼女の予定も聞き出せれば最高。

あの日ライガーゼロの足の下に挟み込んだままのチラシを取り出し、早速見学先の住所やら、開始時刻やらを打ち込み、ついでにメールの最初に「お元気ですか？」のお決まりの書き出しを加えて送付した。

送って10分ほどで、すぐに彼女から返信があった。事務的な連絡とはいえ、女子からももらったメールを開くのはドキドキする。封筒マークのアイコンを開き、「連絡ありがとう」の文字を確認したあと、少し、いやかなり、僕はがっかりしてしまった。

「風邪をひいてしまいました」とあった。やはり鎌倉帰りの冷房車両が原因だろう。「見学会までには治ると思うので大丈夫です。見学会楽しみにしています」と添えられた文章が救いだが、これじゃあ一緒に図書館行って勉強できない、約束してないけど。

無理をさせるわけにもいかないので、結局それから一週間は、メールの遣り取りはお預けになりました。

相変わらずのブラックな労働環境の兄とまともな会話ができたのは、会社がお盆休みに入ってからだった。

夏の甲子園が始まり、つけっぱなしのテレビには僕と違って汗と涙の青春を燃やす高校球児たちが映っている。時折カキーンという金属バットの音がするときだけ視線を向けるが、兄と、そして同じようにお盆休みに入った父親とが、冷房のきいたリビングでぼんやりと過ごしている。

家族団欒、とは違うが、それでも似たようなシチュエーションなのでなかなかヒロシ先輩についての話題を切り出せなかった。

突然、テレビから緊急速報を知らせるピコン、ピコン、という音声の流れ、バッテリーボックスに立って素振りをしている選手の頭上に字幕が表示された。

“〇×原子力発電所の1号炉の炉心内部で部品落下し、緊急停止”
「あちゃー」

放射線関連技師である父親が真つ先にイヤそうな声を上げ、〃詳細な状況はまだわかっていません〃の白文字を見つめ、短く溜め息をつく。その溜め息に起こされたみたいに、兄が半身を上げ振り向いた。「そういうえば、あきらの同級生にヒロシ先輩の妹が居るって話だったよな」

お兄さん、あなたの「柏崎」さんに対する認識は、飽くまで原子炉関連なのですね。

続報を待ち画面を見つめる父親の脇で、兄は天井を見上げ記憶を追っているようだった。

「これはオレが聞いた先輩の話だけど……」

彼女の四歳上の兄は、夏休み明けの9月1日に突然転校したそう。理由は説明されなかったが、噂では離婚が原因だったらしい。インターハイこそ終わっていたものの、バスケット内でも新人戦に向けたレギュラーがいなくなって大混乱したそう。ヒロシ先輩は学年でも人気者だったようで、学期の変わり目の転校で別れを告げることが出来ず、クラスの女子の何人かが悲鳴をあげたという。せめて寄せ書き色紙みたいな物を送ろうと提案したそうだが、バスケット部の顧問の先生からもクラスの担任の先生からも「事情があつて受け取れないので、寄せ書きや手紙のたぐいは遠慮してください」と言われてしまったという。それからの我が校バスケット部の凋落は前に聞いた通りだ。学年違いの兄にとつても、そしてプライベートに関わるものなのでそれ以上の詳しい情報は聞き出せなかった。

聞き出せなかったが

「ちなみにお前が読んでるあのゾイドファンブック、柏崎先輩からもらったんだぜ」

そんなこと聞いておりませんでしたよ！

「あれ？ 言つてなかったっけか。俺がラノベからゾイドに入ったのも、バトストつていう奴に嵌ったのも先輩の紹介って」

疲労困憊でお言葉足りませんでしたよ。そんな大事がことを、いまさら言われても……いや、全然いまさらじゃないじゃないか。

「なんだ明、例のアイアンコングMK-2限定型の彼女のことか」

原子炉部品落下の字幕が消えて、どうも大事故ではなさそうな雰囲気となり、父親が話しに入ってくる。「アイアンコングMK―2限定型の彼女」ってなんだよ、父親は父親で、エリさんをゾイドで認識しているし。

「大強度粒子加速器見学会に参加するのも、主催者としてみればありがたいが、あまりデート向きとは言い難いな。どこか他へ行く予定はないのか」

「ないよ」

半ばふて腐れ気味に返答。まるでタイミングを計ったかのように、テレビではバッテリーがヒットを放ちランナーが一斉にベースを飛び出していた。父親は視線をテレビ画面に向けつつボソリと言う。

「そういえば気がついていたらか。あのアイアンコングのパーツの裏側に、何か名前みたいな文字がマジックで書かれていたこと。頭部パーツのわかりにくい場所にな」

兄が兄なら父親も父親、なぜそんな大切なことをいまさらに。たぶん僕がバラした時は緊張で気付かなかったのだろう。

「でも、ひろし、ヒロシ、弘、浩、寛……オイ、ピヨン吉！つてか」

だからその手の古典的な親父ギャグはやめてくれ。

「……そんな風には読めなかったな。確か、キョウコだが、リョウコだったか」

あのさあ、ヒロシにキョウコちゃんって、まさしく往年のギャグアニメじゃないか。

なんかもう、破天荒な会話に心が疲れてしまった。それでもあのファンブックが、彼女の兄から受け取ったものとわかっただけでも収穫だ。逆転ホームランに湧く甲子園球場の画面を背に、僕は一時その場を撤退する。

自分の部屋に戻り、机においたライガーゼロと、無性に遊びたくなったジェン……ではなくて、エレファンダーを引っ張り出して電池を入れ、久しぶりにスイッチを入れた。

長い鼻をもたげ、四肢をしっかりと踏みしめる悲劇の新鋭ゾイドの動きを眺める。アニメでもバイオゾイドの噛ませ犬役で、いいとこ無

しだったけど、オマエは男女の社会的役割を決めているエライ奴なんだなー、などと支離滅裂な知識が湧いていた。

今度彼女と逢えるのはいつだろう。出来れば見学会の前に、図書館に行きたいな。

いつのまにかエレファントの鼻が机の角にぶつかり、危うくひっくり返りそうになっていて慌てた。

見学会まで2週間だった。

ミンミンゼミに加え、風にまぎれてツクツクホーシの声も聞こえるようになったお盆明け、

「柏崎です。突然の連絡失礼します。お願いなのですが、夏休みの課題と一緒に勉強することはできますか？」

のメールが、僕の携帯電話に届いた。

御都合主義と笑わば笑え。メールの字面を二度見して、しかしこれは現実なんだ、と自分に言い聞かせる。ゾイドファンブックの件も伝えるいい機会なので、躊躇なく「いいよ」の返信を打ち始めた時、ほぼ同じタイミングで二通目のメールが到着していた。

「彩香に数学を教えてあげてください。私も数学は苦手です力になりません。吉山君の都合がつけばお願いします。返信をお待ちします」

なるほど。偏見かもしれないけど、典型的な文学少女の泊さんならあり得る話だし、『将を射んと欲すればまず馬を射よ』とあるように、まずは親友から落とすのも良い。

保留状態の返信文に、「時間と場所のリクエストはある？」と付け加え送信する。ただし、僕と彼女との心の中では、既に待ち合わせ場所が決まっていた。

約束の日、予想通り駅のホームで泊さんと一緒になった。改札を抜けた僕に気付くと小走りに近寄ってきて挨拶してくれた。

「おはようございます、吉山君。今日はよろしくお願いします」

並んだ感じはエリさんよりも若干小柄で、今日は白いつば広の帽子をかぶっている。

「鎌倉以来ですね。あ、これ、あのおとき相沢先生が素敵だったので買っちゃいました。紫外線よけには便利なんです」

言われてみれば似たデザインで、そんなところはやっぱり女子なんだな、と感心した。

到着した電車に乗ると、泊さんは以前と違い背負ったバックから文庫本を取り出し読書を始める。文学談義を振ってこないのは、僕の文

学に関する知識の浅さを知ったからだろう。

残暑は厳しいが、車窓を流れる景色にどこかしら夏の終わりを感じさせる。降りた駅のホームで見上げると、薄い羊雲が青空の一部に群れを成していた。

目指すはあのファミレス。モーニングセットのメニューが残るテーブルを前に、エリさんが待っていた。

「おはよう」を交わし席に着き、ウェイトレスさんにとりあえず軽食とドリンクバーを注文する。見覚えあるサーモンピンクのポロシャツに、いつものアイアンコングをぶら下げたショルダーバックと、テキスト類が入っているらしい黒の鞆が脇に置いてある。

「風邪、大丈夫だった？」

「熱はすぐ下がったし。ご心配おかけしました」

確かに何事もなかったようだ。そして僕は、彼女と遣り取りをしていることを泊さんがいる前で話してしまった事に気付く。だがこの文学少女は、数学のテキストを開く前に、先ほど電車内で読んでいた文庫本を開いて、注文の品が届くのを待っていた。

「違うでしょ、今日は読書するんじゃないんだから」

彼女は僕の斜向かいに、そして正面には泊さんが座る。

(ですよね……)

なにせ今日の勉強の主役は泊さんの方だから致し方ない。渋々とテキストを広げる文学少女を、彼女はまるで保護者のように諭しながら問題を示していた。

悩んでいたのは〔数列〕と〔積分〕の問題で、苦手なひとにとってはどことん苦手な分野だ。泊さんは事あるごとにドリンクバーのサーバに行つてジュースや紅茶を注いできたり、トイレに行つたりしたりして、なかなか問題は進まない。むしろエリさんの方がぐいぐいと食いついてきて、彼女の理解力の早さに少し驚くほどだった。

泊さんが3度目のトイレに席を立ち、彼女はフライドポテトを追加注文する。ウェイトレスさんが去り泊さんが戻らない間、彼女が軽く溜め息をついて微笑む。

「やっぱり数学が得意なのついていいね。吉山君は、やっぱり理系の大

学を目指しているの？」

「別に理系を狙ってるわけでもないよ。ただ、趣味みたいなものだから……」

泊さんに数学を教えた疲れからか、緊張もほぐれ自然に答える。ゾイドの回転軸の描く軌跡に興味を持ったから数学に興味を持つようになったのだと、素直に説明することができた。

「……そうなんだ、やっぱり吉山君のモチベーションの底にはいつもゾイドがあるんだね」

「もともと兄貴の趣味だったんだけどね」

切り出すなら今しかない。僕は彼女にとって微妙と思われる話題を持ち出すことにした。

「その兄とは三つ違いで、昔ウチの高校でバスケット部をやっていたんだ」

一瞬、彼女の顔が強張った。

「いま僕の家にあるゾイドファンブック、これは僕の兄が、同じバスケット部の柏崎ヒロシという先輩からもらったものと聞いていてね。そのヒロシ先輩って、エリさんのお兄さんのことだと思っただけ……違ってたらゴメン」

二人の間に流れていた楽しい雰囲気は消え去り、彼女は口を噤む。やはり触れてはいけない問題だったのかもしれないと、この話題を持ち出した自分を少なからず責めた。

数秒に過ぎないと思うが、ひどく長く思えた沈黙の後、彼女は顔を上げた。

「……不思議な偶然ってあるんだね。でもよかった。吉山君のような、ゾイドが好きの人に大切にされていて」

泣いてはいないが、悲しそうな笑顔。女子のこんな顔を見るは僕の人生で始めてで、パニック寸前に動揺する。動揺しながらも、彼女の透徹とした笑顔に、あの歌のワンフレーズが閃光のように脳裏を過った。

☒いつでも 心を満たすのは 空の青さと風の声

透き通った、美しい笑顔だった。

「おにいちゃん……兄の浩とは、しばらく会ってなくて。お母さん

……母が生きていたころは、いつも仲良く遊んでいたんだ」

「無理して話さなくてもいいよ。それに泊さんが見たら、まるで僕が柏崎さんをイジメたみたいに思われるし」

この雰囲気を変えようとした精一杯の戯けで、その場で適切な会話だったか自信はない。

「そうだね。また今度、二人になれたらゆっくり話します……彩香遅いなあ」

たぶん、僕は彼女の返答に救われたのだと思う。

「来週の見学会も楽しみだね。」

「いったい粒子加速器ってどんな装置なんだろう。それに素粒子、って荷電粒子と一緒になのかな」

多少むりやりに、話題を引き戻してくれた。

「……えっと、荷電粒子というのは、大まかに言って荷電 \parallel 帯電している粒子、プラスかマイナスの電荷を持っている原子分子を構成している素粒子のことで、それを光の速度近くまで加速して衝突させる実験装置なんだ」

「じゃあ、ジェノザウラーやデスザウラーの荷電粒子砲って、その素粒子を発射してるの?」

以降は、父親の受け売り。

「トミー側の公式設定では、実際の素粒子物理学とはかみ合わない部分も多いんだけど、そこは追求しないことにして。」

素粒子にもいろいろあって、その中のクォークっていう素粒子は、大まかに分けて3・3行列式要素の合計9種類に分類されている。ちよつと簡単には説明仕切れないけど、ゾイドの荷電粒子砲の原理を知るにも、数学は役だつし楽しいんだ」

こんなにスラスラと話せるなんて自分でも信じられなかった。本当の意味で、彼女との距離が近くなったのだろう。

(それに今日は余計な悪友がいないこともある。きつとアニメ化されたら、あいつは別カットでクシャミをしているに違いない)

丁度そこへ、数学をやりたくなくて明らかに足取り重く帰ってきた泊さんが、急に話に割り込んできた。

「クオークってなに？ 二人で何を話していたの？ またどこかへ行く予定？」

「あ、彩香には話していなかったけど、今度荷電粒子砲の見学会に行く予定があるんだ」

エリさんエリさん、荷電粒子砲ではございませぬ。いや、原理は一緒だから間違っつてはいないんだけど。

で、流れるに当然泊さんは食いつき、月末の見学会の参加を希望した。普通飛び入り参加はできないのだが、そこは身内の強みだ。ちようど昼休みに入っていた父親にメールを送ると、返信メールではなく直接通話で参加の承諾をもらった。

「明が女の子を二人も連れて参加とはなあ。どっちが本命なんだ。まさか二人とも『みゆき』ちゃんとか言わないよな」

だから、うちには血の繋がらない妹いないし。その前に往年のラブコメネタをブツ込んで来るのもやめてくれ。

正午を過ぎてさすがに店内は賑やかになり、そして泊さんの集中力も限界になった。

「プール行きたいなあ。鎌倉では泳げなかったし」

大きく伸びをする泊さんの姿を見て、やっぱり文学少女のイメージはぬぐえず、思わずクラシカルな半袖スパッツ型のストライプ柄水着を想像してしまった。

当然水着など誰も準備していないので、とりあえず今日の勉強会は終わりになる。彼女はそのまま家へ帰り、泊さんは学校の図書館に寄ると言っつて、一駅でお別れした。

結局ブロントサウルの歌については、話はできなかつた。

まだ日の高い午後、相変わらずガンガン冷房が効いた車内で、僕は彼女が今日見せてくれた美しい笑顔を思い出していた。

さっきの話の続きで、泊さんが6回目のトイレに行っていた間、彼女は目を輝かせながら夢を語ってくれたのだ。

「吉山君の話聞いて思ったの。」

彩香が課題を解く間も、ずっと考えていた。

私、将来ゾイドの開発を試してみたい。

モーター一つ、電池一本で、まるで本物の生き物みたいに動くアイアンコングのようなものを設計してみたい。

——でも理系って、やっぱり女子には不利なのかな」

「ジエンダーなんて気にすることないさ」

やりました！ ジエンダーの用語、有効活用出来ました！

「僕も協力するよ。女性が工業系に不向きとか、男の子だけがゾイドを好きだとか関係ないじゃん。

チャレンジしてみたらいい。好きなことに向かっていこうよ、お互いに」

「ありがと、ホントにいろいろと」

本当に素敵な笑顔だった。素敵な笑顔を思い出しながら、ふと思っ

た。
あれ？ なにか、恋人、と言うより親友みたいなポジションになつてない？ 間違いなく信頼関係は深まっているけれど、ベクトルの向きが違うような気がしてならないのだけど。

ま、いつか。

今度は明後日の午前中。場所も時間も同じ。報酬はランチとドリンクと、彼女のスマイル。

僕の夏休みはまだまだ終わらない。泊さんの課題も終わらない。今度はウオディックとシンカーと、水着を持って行こうかな、と少し邪な下心も生じてしまいました、とは明かさないけどね。

3回目の勉強会を終えた頃、ようやく泊さんの数学は平均点レベルに達するようになる。実はそのあと課題終了のお祝いも兼ねて一緒にプール行きました。でも面倒なのでここには書きません（笑）。

三日後に見学会を控えた午前11時頃、僕のガラ携に彼女からのメールが届く。

いろいろな意味で驚かされた。

「柏崎です。ご相談ですが、アイアンキングMK-IIを見学会に持ち込むことは可能でしょうか」

「いやいやいや、あれかなり大きいでしょ。その前に大勢の見学者で賑わう会場に、貴重なゾイドを持ち込もうとするなんて、子どもがお気に入りミニカーを肌身離さず持ち込むとはわけが違う。」

返信文をどう打つか悩んでいるうちに二通目が届く。

「難しいお願いとは思いますが、お父様に確認をお願いしますか。詳しいことは直接説明したいので、これから会えますか？」

文面から急いでいる様子が読み取れたので、それなりにワケがあると感じとり

「いいよ、いつものファミレスですね」

と返信すると、またすぐに着信した。

「いま〇〇駅に到着しました。準備ができたなら連絡ください。それまで駅で待っています」

なんと、彼女はもう家の近くの駅に着いていたのだ。

いつになくアクティブ。取り敢えず支度を調べ飛び出そうとして、ハタと立ち止まった。

（お金、無い）

下世話な話、先日のプールと食事で、僕の心許ない小遣いの蓄えが尽きていた。

「あきらちゃん、どこかへ行くの？ お友達？」

「丁度買い物から戻った母親と、玄関で鉢合わせになる。敢えて「お友達」と言っ探りを入れて来た。状況が状況、単刀直入に答える。」

「いま柏崎さんが駅まで来て、会いたいって言ってるんだ。小遣い前借りさせて」

「ほい」

母親は即座に千円札三枚を差し出し「しつかりがんばってきなさい、失恋を恐れちゃダメよ、青春なんだからー」

なんで僕の家族ってこんなキャラばかりなんだろう。それでも軍資金は手に入った。僕は普段の通学には使わない自転車を引っ張り出して駅に向かった。

アスファルトに明暗のコントラストを刻む、残暑の陽射しが降り注ぐ道を走る。

駅の待合で、彼女は薄い赤のポロシャツと、キュロットタイプのスカート姿で座っていた。飾り気が無いように見えて、ポロシャツのボタンはルビーのような鮮やかなクリアーレッドだった。

「ありがとう、きてくれて。しばらく彩花との勉強会が無かったから、なんだか久しぶりだね」

さりげなく、男子としてとても誇らしい発言、しかも今日は二人きり。自信とテンションが上がる。

「何かわけがあるんだよね。とにかくゆっくり話せるところへ行こうよ」

ルーチン化していたいつものファミレスが無いので、きつと僕ひとりであれば場所選びに当惑していただろう。しかし軍資金の他に、僕は母親より戦略を得ていた。

自転車を押し、駅の近くのコーヒーチェーン（ス〇バとか、ド〇ーとか）とか想像してください（に向かう。この発想は、普段から外食を楽しむんでいる主婦だからこそ得ている知識だろう。店内席の隅に空きがあることを確認し、やたらと長い銘柄のコーヒーを注文する。エリさんは抹茶のスムージーらしきものを頼んでいた。

「急に呼び出してごめんなさい。それもこんなことで、とは判っているんだけど」

注文品が届くまで数分かかる。彼女はテーブルに置かれたお冷やのグラスの水滴が、敷かれたナプキンに吸い込まれていく様子をぼん

やりと見つめているようだった。

「(※アイアンコングを持つていくことは)できると思う?。」

「言った通り、父親が出勤中だからまだ確認できないけど、あんなに大きなもの、それも大事なものを見学会に持ち込むのって、安全管理上も難しいんじゃないのかな」

「だよね」

予想していたらしく彼女に動揺はない。僕は続けた。

「仮に持ち込みが可能だとして、その申請理由なんかも書かなければならないと思うんだけど。理由、教えてくれる?。」

「見せたかったんだ、お母さんに」

即答だった。

お母さん。彼女の亡くなった母親のことだ。でもまた話が飛躍している。なぜお母さんとアイアンコングが結びつくんだ。

「正直に言うね。あのアイアンコング、お母さんの遺品なんだ」

彼女と付き合っているといういろいろ驚かされることが多いから、ある程度耐性が着いていた。母親がゾイドファンだった、という事実だけでもレアケースだけど、僕の関心はあくまでアイアンコング持ち込みについてだけに集中した。

「違ってたらゴメン、つまり柏崎さんのお母さんの遺品のあれを見学会場に持ち込んで、お母さんの代わりに粒子加速器を見学させた、っていうこと?。」

少しだけ上目遣いになって、彼女は無言で肯く。ちょうどその時注文ナンバーが呼ばれ、彼女は「私が行く」と告げ多少忙しげに席を立った。

グラスの下のナプキンはわずかに水を吸って変色している。予想以上に重い提案の様子に、僕も少し息苦しくなっていた。

トレイに乗せられた透明なカップを二つ、それとカウンターでその場で買ったらしいスコーンも二つ乗っていた。

「よかったら食べて。それと、もう付き合って長いんだし、下の名前で呼んで欲しいんだけど、いいかな」

「ありがとう、ごちそうになるね……」

って、オレのバカ！　これまで淡泊なつき合いを続けてきたので反応が遅れた。目の前のスコーンより、さっきの彼女の発言の終わりこそ重要なのに。

ばつの悪さをごまかすように、反射的にクリームの添えられたカップを手にする。水滴に手が濡れるのも気にせずストローを刺し込む。シロップを入れていないコーヒーの底の味はほろ苦いはずなのに、不思議と甘みを感じた。

彼女もスムージーにストローをさし込むと、柔らかそうな唇で吸い上げる。鮮やかな抹茶の色と、ポロシヤツのクリアレッドボタンを見て(デイマンティス色だな)などと考えてムリヤリ自分を落ち着かせていた。

「本当にうれしかったんだ、あるときジェンダーって言ってくれたこと」

透明なキラードームのまん中に開いた穴にさし込まれたストローを軽く回すと(※これはゾイド小説です、あくまでゾイドの表現にこだわります)、彼女はカップから視線を上げて僕を優しく見つめる。

「お母さん、というか大人で女のひとで、ロボットのおもちゃが好きだなんて、普通変だよ。でも『好き』に理由なんてないんだよ」

「『好き』に理由なんてないんだよ」のセリフに、今回もドキツとさせられる。僕を見てはいるけれど、彼女は彼女自身に語りかける口調になっただけだった。

「いろいろあったみたい。おじいちゃんとおばあちゃん——お母さんの親の方——にも、『もつと女の子らしいもので遊べば』と、何度も注意されたらしい。でもお母さんはいくつかのゾイドを集めて一人で遊んでいたんだって。だって同じ女の子でゾイドで遊べる子どもなんていないから」

「じゃあ、男の子とは遊ばなかったの？」

彼女はちよつと眉を下げて笑う。

「みんなが明君みたいに丁寧に扱ってくれるならいいけど。わかるよね」

ああ、そうだった。

もともとゾイドのパーツが大きめに作られていたことも、分解してもすぐに組み戻せるようになっていたことも、子どもが多少乱暴に扱っても大丈夫なことを考えてのことだ。でも壊れない保証なんてあるわけない。Mk-2限定版が稀少なものもそれが理由だ。おもちゃなんてガチャガチャ遊んで壊れて捨てられて、子どもは成長していくもの。僕の机の上のライガーやエレファンダーだって、いつまでも遊び続けられるものでもない。

「小さい頃、お兄ちゃんと私とで、お母さんの貴重なコレクションをたくさん壊しちゃった。でも、そこは母親なんだね。苦笑いしながらも許してくれた。

それでも二つだけはケースに入れて飾っていて、めったに動かさなかった。その一つが赤いあれで、もう一つが大きな大砲を背負った茶色い恐竜」

「ゴジュラスMk-2限定型」

阿吽の呼吸。

兄貴が言っていた浩先輩のゾイド、彼女のお兄さんのもの。次第に点と線が繋がってくる。

「離婚していることは伝えたよね。別に両親は不仲だったとか、DVがあつたとかじゃやないんだ。でも、決定的に違っていたんだ、お父さんとお母さんの、価値観つてのが」

彼女の視線は少しさみしげに見えた。

「ゾイドのことだけじゃない、つてことは断っておくね。でも両親はだんだんすれ違っていった。お母さんは工業高校に進学したくらいだから、もともと技術職に興味を持っていたらしい。私と違って数学も得意だった、明君みたいに」

偶然コーヒーを飲んでいた時だったので、僕はストローを啜えたまま無言で首を振る。

「謙遜しなくていいよ、彩花に問題を教えるの、とっても判りやすかった。それに、明君が自分で楽しんで勉強しているのもわかった。やっぱり好きになることが大事だって、すごくわかった。

話を戻すね。お母さんは自分の可能性を自分で閉ざした後ろめた

さに悩んでいたのがわかったのは、ゾイドのビデオテープを探し出したときだった。大切に梱包されたテープは、どちらかと言えばお兄ちゃんのために撮りためたもの。でもお母さんも一緒に楽しんでいて、兄が見なくなつたあとにカビが生えないようにしてしまい込まれていた。それと、細かい文字が印刷された何十枚ものプリンター用紙。日記みたいに書きためた、お母さんの記録だった。文字列のなかに何度も「荷電粒子」という言葉が書かれていた。明君が教えてくれた素粒子物理学にも、お母さんは興味を持って調べていたみたい。

覚えてる？ 前に『モーター一つ、電池一本で、まるで本物の生き物みたいに動くアイアンキングのようなものを設計してみたい』って言ったこと。あれって実は、お母さんの夢だつたんだ」

僕は黙って聴いていた。お世辞でも自慢でもなく、本当の意味で彼女との信頼関係が出来上がっていると実感した。

「ジエンダー、って良い響きだね。まるでサラマンダーとかエレファンダーみたい。

そして性的役割でヒトを縛り付けるものを解放する、歴史に名を馳せた英雄みたい。

だからうれしかった。明君が、価値観に縛られない人間だつてことに」

「そんなこと……」

9年間の義務教育を経て、半年間の高校教育の重要性をまじまじと感じる。この時ほど、「勉強しておいて良かった」と感じたことはなかった。なにより、僕と彼女のセンスが一致していたことが素直に嬉しい(サラマンダーの件ね)。それと一緒に、それほど深い意味合いで言った言葉でもないもので気恥ずかしくもあり、次第に耳たぶが紅潮する。注文品が冷たいものであったことに感謝した。

冷静を装う僕を前に、彼女のカミングアウトは続く。

「お父さんには進学費用は心配ない、って言われてる。でも進学は保育士とか介護職とか、「女らしい」進路でいいんじゃないか、つても言われているんだ。それに数学は得意じゃなかったし。

でも、明君が協力してくれるなら夢じゃなくなりそう。彩花と一緒に

に、もつと勉強を教えてくださいませんか？」

「もちろん」

飲み終えたカップには、クリームのかかった氷が残っている。すったストローが「ズズズ」と品のない音を立ててしまいい、僕は苦笑して、彼女も笑った。

「明君のお兄さんの言った通り、ゴジュラスはお兄ちゃんが持って行った。お兄ちゃんがゾイドを好きになったのも、やっぱりお母さんの影響。でも、離れて暮らして、そして大人になっていく内に、忘れられていく宿命なの、おもちゃも、いろいろなものも……」

時間にして十数分、決して長い話ではないけれど、ここまで語ってくれた彼女の素性は、長く重い内容だった。

「理由はわかったよ。でもやっぱり確認をとってみたいと。理由を話してとにかく父親に相談してみる。保証はできないけど、明日まで待ってもらえるよね」

「うん」

聞き分けのない子どもではない。しかし、彼女の瞳には懇願するよな光を浮かんでいた。

「いろいろと話してくれてありがとう。明後日の見学会、楽しみにしてる。泊さんにも確認しておいて、エリさん」

「わかった」

本当に嬉しそうな笑顔だった。

まだまだ聞き足りないことはある。しかし今日はこれまでにしよう。知らなくてはならないことと、知らなくてもいいことがある。それが二人の間に芽生えた信頼というものだ（芽生えたのが「信頼」、というのが残念なのだが）。

会計のとき、全額出そうとした彼女に、僕はワリカンを申し出た。母親からの軍資金があるので僕が全部払うこともできる。でも「対等の立場になりたいんだ」として、端数だけ出してもらって店を出た。炎天下に置かれた自転車のハンドルグリップは熱かったけれど、僕の心は秋の空のように澄み切っていた。

自転車を押す僕に一度だけ振り返って、彼女は駅に向かう。

ポロシャツのボタンが、ダイヤモンドの眼のようできれいだつた。

その日の夕方、マニアックな父親が僕以上に乗り気になり、持ち込みを許可してもらうのに一日としてかからなかった。

いよいよ明日は粒子加速器——彼女にとっての荷電粒子砲——の見学会だ。

朝の気温はだいぶ爽やかになり、彼女は薄手のパーカーを羽織っていた。屋内施設見学を想定し、バイザーや帽子は被っていない。

みんなが幾分眠そうな挨拶をする。

「今日はお世話になります」

「宜しくお願いします」

「お邪魔します」

早朝6時、中型セダンの自家用車に、四人の高校生が窮屈そうに詰め込まれた。見学会場まで約1時間半。途中高速道路を使用するので全員シートベルト着用をするのでなおさらキツイ。

彼女の事情を聞いた父親は、最初僕たちが電車と当日見学用のシャトルバスを利用し訪問する予定だったのを、施設の所長さん（「デビジョン長」って言うそうだ）にお願いして見学開始前に入場できるようにしてくれた。大きな荷物を持って移動するのは他の来場者の中では迷惑になるかもしれないし、事情を知らない人からすると変な目で見られ兼ねない。最初の見学グループとして会場を回れば、少しは目立たずに移動できると考えられたからでもある。

「貴重なゾイドだし、壊れたら大変だ」

趣味に関することとなるとつくづく仕事が早い。昨夜帰宅した父親は段ボールを加工し、中にスポンジと発泡スチロールの緩衝材を入れて、箱の上のふたがちょうど秘密基地からスーパードロロボットが出撃できるような観音開きの輸送ケースを、わずか1時間ほどで完成させた。あの日、エリさんが修理を終えたアイアンコングを持ち帰った時に使った段ボール箱よりかなりコンパクトで、取っ手までついて運びやすくなっている。

父は目測でサイズを覚えていたらしい。朝、彼女から手渡されたアイアンコングは、ビームランチャーとマニユールバスターこそ外したものの、両肩の幅と両足と腰の段差を含め見事に収納にフィットした。緩衝材のスポンジは、母親が通販で定期購入している化粧品 の箱に封入されていたもので、「こんなことがあるのか」と普段父親が保管

していたもの。短時間でこのレベルの輸送コンテナを作成できるあたり、さすが職人、と感心する。大人の実力を改めて思い知らされた。アイアンコングの箱は、万が一の急ブレーキなどでゆれないように前後で固定され、トランクに入れられた。

「これで大丈夫ですよね」

「はい、本当にありがとうございます」

トランクに入れる時も、父親は彼女の確認の上で収納した。持ち込む理由は知っているので父も詳しく話しかけることはない。その辺はまさしく大人の対応だ。

「途中喉が渴いたり、トイレに行きたくなったりしたら遠慮無く言つてね」

小さく「ありがとうございます」「わかりました」などの声が後部座席から聞こえる。当たり前だが、僕が座るのは助手席だ。エリさんは後部座席の左側、押川は右側、そして一番小柄な泊さんが必然的にまんな中に座る。

ところで、本来なら僕と女子二人での見学に、もう一人追加されていることにお気付きだろうか。

時間は巻き戻り、数学勉強会真つ盛りのころである。暇を見つけてはメールを送りつけて来る押川から、またも脈絡なく「夏の思い出を作りたい」のメールが到着した。返信するのも面倒くさくてしばらく放っておいたところ、直接自宅の固定電話にかけてきやがった。

「なんで返信しないんだよー」

わかったわかったと生返事をし、やむなく携帯でかけ直す。

「俺、鈴木先輩に興味があつて……」

確認しておく、鈴木さんとは文芸同好会の会長として鎌倉旅行を企画実行した先輩だ。

「そうか、がんばれよ」

と、素っ気なく対応するも、何度もメールを送り自宅電話にまで連絡してくる程なので簡単に引き下がるはずもない。「どうだと思う、可能性はあるのかな。カレシいるのかな……」。

そんな接点も少ないキャラについて聞かれたところで答えられる

はずもないだろう。でも無言を貫けばもつと面倒なことになりそうなので、一応テキストに返答をする。

「鈴木先輩なんて、泊さん以上に文学オタクだろ。俺たちが（文学）話について行けるわけないだろ」

「そう思う。そう思うけど、可能性はゼロじゃないと思うんだ」

戦後教育の間違い（父親談）。「可能性はゼロではない」と「不可能性は百分に近い」は同列であって、押川は「努力すれば夢は叶う」の幻想を抱くという大いなる過ちに陥っていた。

その病状が進行した奴をなんと呼ぶか知ってるか、「ストーカー」っ
て言うんだぜ、という言葉をグッと飲み込んで

「やめておけ」

と告げた。

そのあとまた延々と似たような話を聞き流し、適当にうんうんと答えていると、

「そういえば、泊さんとお前、勉強会してたんだってな。なぜ俺を誘わなかった、二人きりになりたかったのか、オマエらデキてるんか」

「どこで聞いた、それに二人きりじゃねーよ！」

言ってから（しまった）と気付くが、手遅れ。どうやら無警戒な泊さん本人から聞いたようだ。「じゃあ、誰だよ」の流れから数学の勉強会の説明になって、夏の予定になって、プールに行き損ねたことになって、そして粒子加速器の見学会になった。あとはお決まりのパターン。もはや鈴木さん（先輩）は関係ない。

まあ、腐れ縁とは言え一応友人だし、ここで女子二人だけを連れて行ったら、夏休み明けになんて言われるか面倒くさいので、男子高校生一名が見学者リストに追加されたわけでした。

過ぎゆく夏の終わりを惜しむように、朝早くからツクツクホーシが鳴いている。玄関先で見送る母親が手を振っている。母の生温かいまなざしは、（なんであんたが彼女の隣に座らないの）と語っていた。

一般道を抜け、車はインターチェンジへ。

休日の早朝なのと、下り方面の高速道なので、次第に交通量は減っていく。

最初は借りてきた猫みたいに黙っていたが、やっぱり口火を切ったのは無警戒な文学少女の泊さんだった。

「これから向かう紫峰のふもとは、古代ヤマトケルが起源とされる連歌発祥の地で、二条良基の連歌集が有名なんです」

「レンガ発祥？ その頃からあつたんだ」

押川、多分違うぞ。

「他にも陽成天皇の和歌に男女川みなのがわつて恋の歌があります。ステキな歌ですよ。昔からかがい嬬歌っていう逢い引きの習慣もあつて、そんな場所に行けるなんて、なんかロマンチックです」

「合い挽きか……うんうん」

それも多分違うぞ。

「そういえば、明くん」

今度は彼女が尋ねてきた。

「前にクオークは9種類あるつて教えてくれたけど、調べたら6種類しか無かったの。アップ、ダウン、トップ、ボトム、チャーム、ストレンジ。他の三つつて、もしかすると新しい素粒子？」

えっ、そこまで調べてたの。僕だつて聞きかじった知識しかなかったので詳しくはない。

「あきら、そんなこと教えたのか。間違ってるぞ、彼女さんの言うようにクオークは6種類だ」

助け船、というかフォローに入ったのは外ならぬ父親だった。

「彼女さん、仰るようにクオークは6種類。詳しくは予備知識を増やしてもらわないと説明しづらいが、それを究明するのがこれから行く加速器なんです。」

おおかた彼女さんへの格好付けに、付け焼き刃の知識を披露したんでしよう。許してやってくださいね」

「……彼女さん」

そこを拾うな押川。

「父さん、カノジヨさん、は止めてくれよ。柏崎さんだよ」

「ああ、そうか。柏崎さんだったな」

「……いえ、明くんにはいつもお世話になってますから、お気になさら

ずに」

泊さんは専門外の素粒子物理学に振られて静かになっている。僕は少し気まずくて振り向くことが出来ない。

車内が妙な沈黙に包まれたとき、彼女が膝に乗せたバッグからCDケースを取り出した。

「よければこれをかけてもらえますか。みんなに聴いて欲しいから」
運転席と助手席の間から、パーカーからスラリと伸びる彼女の真っ白い二の腕。CDを受け取る時、少しだけ白い指に触れた。

ジャケットには「レベツカ」のアーティスト名。アルバムタイトルは『ブロントサウルス』。鎌倉旅行で話に聞いた、あの曲のアルバムだった。密かにゾイドのBGM集を予想していた僕だが、さすがに違った。押川も泊さんもまだ聴いていなかったし、父親は「懐かしいねえ」と言いつつコンソールのCDプレーヤーに挿入する。

J※SR※Cだかア※ラックだか知らないが、歌詞を記入するといろいろ面倒なので書かない（書けない）。

運転に支障が無い音量で、若干甲高い90年代のボーカルが車内に響いた。

それが、彼女の母親のお気に入りの曲と知っているのは僕たち二人だけなので、それぞれの反応は薄い、それで良かった。

彼女の母親が見たかった紫峰のふもとにある粒子加速器を、お気に入りだった曲を聴かせながら向かおうと思っているのだろうか。泊さんは泊さんで「……これが『櫛ノ木大学士の野宿』の恐竜の歌ね」と反応するし、押川は押川で「ベツキー……」と反応している。いや、それも違う。

ノスタルジーとは異なる、それでいて夏の思い出を刻む歌をBGMに、窓の外を雄大な紫峰が流れていった。

7時半に会場到着。テロ対策、だそうで、テトラポットを小さくしたようなコンクリートブロックが並べられたゲートを、障害物を避けて車はジグザグに進む。

守衛さんに許可書を提示し、一緒にボードに挟まれた名前を書く紙を渡された。記入を終え駐車場に案内される。まだ開場前で、父親を

含め見学者扱いなので、普段利用している駐車場とは違ったようだ。広大な敷地には緑地が広がっていて、ところどころに変電所のような施設と、ガラス張りのいかにも「研究施設です！」という風体の建物が建っている。きれいに刈り込まれた芝生に残暑の陽射しが降り注ぎ、まだ夏は終わっていないと主張している。

手続きをしてくると言って、建物の一つに父親は入っていった。その間僕たちは、これから始まる施設見学イベントのために設置された簡易テントの折りたたみ椅子に座って待つことにした。

段ボールのケースは、一見ペットを運ぶケージの様だ。揺れてもカタカタと音がしない設計に、彼女も安心して大切な荷物を手にしていた。

施設を眺望し、

「あれがビームライン」

と、彼女が語尾を上げながら呟く。

「たぶんそうじゃないかな、円型粒子加速器の。でもライン自体は地下にあるはずだけど」

「絵梨はいつの間に調べたの？」

泊さんはいつも僕が聞きたいことを聞いてくれるところが大好きです（※著者も大好きです）。

「だって、荷電粒子砲の原理だもの。折角ご招待してくれたんだし、それに面白いよ、物質の成り立ちがどうなっているのかを調べるのって」

「家電リサイクル法ならわかるぞ」

少し黙ろうか、押川。

ふと彼女を見ると、ケースの蓋を開け、中のゾイドを確認していた。

「……お母さんのノートに書いてあったんだ」

ゾイドのVHSと一緒に入っていたメモ書きのことだろう。それにしても、彼女のお母さんスゲー！

「素粒子物理学まで」

「高校の物理Ⅱの教科書の終わりの方に載っていたんだ。よっぽど興味があったんだね」

なんだろう、その話を聞いて、僕は次第にモヤモヤとした何かが湧き上がって来ていた。

洒落にならない感情、これがジェンダー差別という奴か。

彼女の母親は、その両親からも技術系の進路選択を諦めさせられたという。

ゾイドが好きということ、友達もできなかった。

【女らしく】という呪縛の悔しさが、僕にも伝わってくる。

誰にも邪魔されず、のびのびと数学の勉強ができる僕とは大違いだ。

そんな煮え切らない感情とは無関係に、手続きを終えた父親が多少速足で戻ってきた。

「施設内見学ツアーは今から30分後からになる。それまでエントランスで解説を聞いてみてくれ。解説員にとってもリハーサルになる。君たちは半分お客さんで半分関係者みたいなものだからね」

「はい、ありがとうございます」

率先して返答したのが彼女だった。社交辞令などではない、本当に嬉しそうな様子で。

本当に良かった。彼女をこの見学会に招待してあげて。入学直後、赤いスマホに視線を落とし、少し寂し気な姿をしていた姿はどこにもない。

何にでも興味を持つ泊さんと彼女が嬉々として（暗黒大陸の上陸地点ではない）エントランスに向かい、その女子の姿を押川が嬉々として追う（この表現アブナイ）。

吹き抜けの明るい空間に入った瞬間、僕たちは息を呑んだ。

直径5mはあろうかという正八角形の構造物。八角形の表面には無数のコードやケーブル、その他理解できない無数の紋様が刻まれている。

幾何学的なデザインはそれが飾りではなく、全て意味を成す存在であり、ぎりぎりまで機能を集約した芸術品でもあった。

「これがこれから見学する大強度粒子加速器、【パーシヴァル】の1/4縮尺モデルだ」

「よんぶんのいち！」

四人の声が揃う。

実物はこの四倍。僕たちのテンションは否応なしに盛り上がっていった。

傍目には滑稽かもしれない。

しかし、胸に抱えた箱の蓋を開け、赤いゴリラ型ゾイドとともに粒子加速器（の測定器）縮尺モデルを見上げる彼女を揶揄する者はいなかった。

瞳が少し潤んでいる。純粹に人類の技術力に感嘆するのは別に、彼女のなかには母親との思い出が込み上げていたに違いない。

「折角だし、みんなで記念撮影しよう、もちろんアイアンコングも一緒にね」

父に赤いスマホが手渡され、僕たちはアクリル製で所々がLEDで明滅する粒子測定器模型の前でポーズを取る。

美しいクリスタルの造形物を背にした彼女の胸には、ビームランチャーとマニューバスタラスターをフル装着した赤いゾイドが抱かれていた。

最初に通されたのが、エントランス脇の映像ホール。だいたい学校の教室2つ分ぐらいの広さだろうか。折りたたみ椅子が50脚ほど並べられ、シエードと暗幕を降ろしてプロジェクターの映像が流れている。

「おはようございます、吉山技術主幹からお話は伺っております——
おー！ 噂に聞いたアイアンコングMk-II限定型だ！」

「どうぞ前の方へお座りください——なんとおー！ 貴重なアイアンコングMk-II！」

「映像を流します、最初ピント合わせますので少々お待ちください——
これはこれは、タカラとの合併以前のトミー時代、メカ生体時代のアイアンコング！ 生きてお目にかかれるなんて、ありがたやありがたや」

反応がほぼ一緒。

もともと技術職で、根本的にウチの父親と同族の方が多だろうとは予測していたが、ここまでだったとは。うら若き乙女の姿には目もくれず、一斉に赤いゾイドに関心が集中するあたり、実に個性的な

人々である（婉曲な表現）。

彼女は隣の椅子にアイアンコングをちよこんと座らせ、そして僕たちもスクリーンを注視する。

ホールの灯りが落ち、シエードの隙間から断片的に夏の陽射しが漏れるなか、映像が流れ出した。

“荷電粒子は電場によつて加速されます。どれだけ高いエネルギーが得られるか、静電場を使う場合、それはどれだけ高い電圧が得られるかにかかっています”

？

“大型円形加速器への道は、高周波加速器における位相安定性の原理の発見と、それに基づくシンクロトロンの登場によつて、アジア太平洋戦争直下の1944年に開始されました”

??

“粒子ビームの集束は磁場、つまり電磁石で行いますが、凸レンズと凹レンズを組み合わせることで強力な集束が実現しました。当初の素粒子実験では、加速ビームを固定の水素標的に衝突させていましたが、この方式では必要なエネルギーに到達できません。そこで2つのビームを別々に加速し、ビーム同士を正面衝突させ、電子、陽電子、反陽子などの衝突実験を行うことのできる衝突ビーム型加速器、コライダーが登場します”

???

（おい、これ日本語なのか）

（たぶん……）

映像には字幕がついているが、僕らにとってはまるで惑星Ziの未知の言語みたいに理解が追いつかない。果たしてこれを「一般見学コース」と定義して良いのだろうか、などという根本的な疑問を抱きつつ、およそ20分の映像は終了する。

「ちんぷんかんぷんで、ぜんぜんわからなかった」

立ち上がった彼女の顔は、しかし言葉とは裏腹に嬉しそうだ。

「僕も全く」

「私もです」

「俺も……」

押川、言わずとも良い。

「でも、ものすごくわくわくする。これが現実の荷電粒子の流れを調べる、すっごい機械だっていうことが」

口調がかなり興奮している。キラキラする瞳は、もう母親との思い出のためではなく、彼女自身の夢に直結していることもわかった。

再びアイアンコンングを箱に入れ、係の人の指示に従いホールを出る。

冷房の効いた部屋からいきなり野外へ。朝到着したまでは快適だったのに、いきなり強烈な熱波が襲ってきた。

帽子の類いがないので、彼女は反射的に手をかざし陽射しを防ぐ。その大人っぽい仕草に、またも僕はドキつとしていた。

最初に待機していた仮設テント前に、いつの間にか簡易バス停の看板が立てられ、時刻表が貼り付けられていた。僕らはホールでもらった見学記念のクリアファイルやポケットティッシュ、ペーパークラフト、そして施設解説の薄い冊子やらが入ったビニール袋を下げた移動する。

「持つよ」

「ありがと」

気兼ねなく荷物を預けてくれる信頼感が尊い。遂に僕らはここまでの関係になりました、と見送ってくれた母親の顔を思い浮かべる。(それを「恋人」って言っているのかしら?)

脳内の母親にツッコまれ、はつと我に返っていた。

そうこうしているうちにシャトルバスが到着。冷房が効いた車内で一息ついた。一部障害者用を除き、座席は見学者をたくさん運べるようにたたまれている。広大な敷地の整備された道路を走ること数分。二番目の見学箇所、【電子・陽電子線形加速器】とかかれた建屋に到着した。同伴の父が係りの人に軽く挨拶する。

「本施設は名称の通り、電子と陽電子を生成する施設です。電子の場合、強力なレーザー光をレアアース合金に照射し生成します。そして陽電子の場合は、同レーザーをタングステン標的に衝突させて生成し

ま——あー！ 謎のコマンドー、エコーが搭乗した赤いカスタムゾイド！ 大氷原の戦い、ザブリスキーポイントでロイ・ジー・トーマスの操縦するゴジュラスMk-IIと一騎打ちをした機体じゃないですか!!」

この施設にはこんな人しかいないのか。いや、別にいいんだけど。地下空洞に設置されたビームラインは軽く数百mはあり、見渡しても終着点が見えない。

「直線全長700mあります。生成された電子ビームの一部は、皆さんの次の見学施設の【放射光加速器】と【パーシヴァル】へ導かれます」

磨き抜かれたステンレス光沢をもつラインは、無数のパイプに繋がれ無限に続きそうな雰囲気だ。

線形粒子加速器、ゾイドに例えればゼネバス砲を装備するセイモサウルス型といえるだろうか。

「セイモサウルス型ですね」

以心伝心！ 彼女も立派なゾイダーです。これがわかるのは、ここでは僕たちだけ——

「よくご存じですね。惑星Ziでは僅か数十mサイズのゾイドでも充分な粒子加速が得られる物理設定なのでしよう。我々地球の技術者とすれば羨ましい限りです。あ、『フューザーズ』のリヒター・スケール機は別格ですよ」

うわっ、係りの人が反応した。だいたい30〜40歳代の職員さんだろうか。おじさん、というのは失礼ながら、お兄さん、というにも無理がありそうな年代。『フューザーズ』を引用するあたり、この人もなかなかディープなゾイダーである。

再びシャトルバスに乗り、三番目の見学箇所【放射光加速器】へ。施設内に入る前、僕は誰かの視線を感じて振り向く。柔らかそうな物体の、黒い円らかな瞳が見つめていたのだ。

「ネコ……?」

地下のビームライン空洞入り口の影に、キジトラ柄の猫がこちらの様子を窺っている。

「こんなところに、ネコ?」

「ホントだ」

至って普通の猫。しかし硬質でメカニカルな施設の真ただ中、モフモフの小動物の存在は際立っていた。妙に人に慣れていて、おもむろに近づき彼女の足に擦り寄る。意外なのは泊さんが猫の扱いに慣れてたこと。猫のお尻を軽く叩き始めると、猫は喉を鳴らしてお尻を向け、恍惚としている。係の人がやってきて

「ああ、その子はヘルキャット2号ちゃんです」

あ。もう驚かないぞ

「広大な施設内には往々にしてネズミが巣をつくります。なので施設管理のパトロール要員として、にゃんこを数匹飼っているのです。それは2号ちゃん、当然ヘルキャット1号ちゃんもいます。他に、茶トラのセイバータイガーちゃん、ミケのばくうちゃん、黒猫三兄弟のあいんちゃん、ツヴァイちゃん、ドライちゃんがいます。あ、ドライちゃんが2号ちゃんを迎えに来ていますね」

別ジャンルが混じるという別の意味で驚いた。それにこのひと、「にゃんこ」って言ったぞ

確かに建物の物陰にも黒猫がいた。ヘルキャット2号はひとしきり遊んでもらうと、黒猫を伴い尻尾を立てて揚々と去って行く。それにしても……ネーミングセンス。

閑話休題。施設見学と「にゃんこ」の係の人の解説へ。

「光の速さに近い電子が、電磁石など磁力線のローレンツ力によって曲げられるとエネルギーの一部がはぎとられ、強力な紫外線やX線などの放射光が放出されます。その放射光を物質科学などで利用するための加速器が、この施設になります」

「X線って……放射能のことですか?」

珍しく泊さんの質問。

「厳密には放射線ですね。放射能とは放射線を発する物質能力自体を示すものです。実際加速器が稼働を開始した場合、操作は完全リモート制御に移行されますので人体に影響はありません。」

それでは施設について。当円形加速器は全周約300mで出力3

0億電子ボルトのフォトンファクトリー蓄積リングと、全周400m、70億電子ボルトのフォトンファクトリーアドバンストリングの二つの加速器で構成されており、周囲の様々な実験ステーションに放射光を供給しています」

「30億電子ボルト、30億っていうと……3ギガ？」

「そうです、ゴジュラスギガ3匹って、覚えてください」

意地でも、意固地になっても驚かないぞ

もしかして、この施設職員の採用条件には、『ゾイドのバトストおよびファンブック精読』って条件があるんじゃないかと本気で思えてくる。

「無印アニメ版のウルトラザウルスが装着したグラビティキャノンがプラネタルサイト砲弾を発射する際、劇中カール・リヒテン・シュバルツ大佐が15テラボルトと言っていました。テラはギガの更に千倍、1兆電子ボルトになります。つまりフォトンファクトリー蓄積リング出力の5000倍、フォトンファクトリーアドバンストリング出力の約2143倍です。いやはや、もの凄い代物です」

「いやはや」って、もの凄いのはアナタの方ではないですか。恐らく無印ゾイドアニメ直撃世代と思える年齢の方だが、立て板に水のスラスラと解説する様子がスゴイ。そして、押川と泊さんは呆然としていた、当然だけど。

あつ 全然驚いてませんから

遂に四番目の見学施設、「パーシヴァル」へ向かって、延々と伸びるビームライン（の地上施設）に沿ってシャトルバスが走る。

「もうわかったと思うが、さつきエントランスで見た模型は、粒子加速器の本体ではなくそのほんの一部。加速された素粒子同士を衝突させたとき、どのような反応が起こるかを調べるための巨大な測定装置に過ぎない」

雄大な紫峰を望みながら父が告げる。

「さまざまな装置が稼働して、この研究施設は運営されている。どのシステムが欠けても成り立たない。しかし、どのシステムが欠けても稼働できるようにバックアップを備えてもいる。つまりシステムに

『遊び』は不可欠なことだ」

不可欠な『遊び』。確かに僕たちはこの施設見学を通し、本気で『遊び』を謳歌している人たちに出逢っている。

「ムダは無駄ではない、っていうことですね」

「そう、彼女さんの言う通り！」

父の、明るくて、重い言葉。

僕たちは黙って頷く。僕はこの時「彼女さん」という父の言葉を否定しなかった。

僕ももう一度、紫峰を見つめた。

ここは泊さんの言うように、歴史と文学と科学が共存する場所。

そして彼女と、彼女のゾイドと、荷電粒子砲に出逢える場所。

何物にも替えがたい貴重な経験を得ていることを、いま僕はしみじみと噛み締める。ここでは面はゆくて言えないけど、家に帰ったら必ず父に言おうと思った。「今日は連れてきてくれて、本当にありがとう」と。

ふと見ると、父は携帯電話で会話していた。その時は何気ない素振りに見えていた。

【パースヴァル】の見学建屋は、さっきの見学施設の【放射光加速器】の反対側に位置している。何の反対側かというと、【パースヴァル】の巨大な円形ビームラインの中心点を挟んだ向こう側ということで、ここに【最終ビーム集束用超伝導磁石】というマイクロン単位で荷電粒子を集束させる装置と、エントランスで見学した巨大な八角形の粒子測定器があるのだ。

「アイアンコングMk-IIのご一行様ですね、お待ちしております」
もうその呼び方でいいや

「本施設は、この研究所の主要施設となる、一周4.5kmの国内最大級の円形加速器の粒子衝突点です。円形ビームラインは二本あり、それぞれに電子リング・陽電子リングに分けられています。

電子リングの加速には20ギガボルト、陽電子リングには7ギガボルトの負荷をかけ【電子・陽電子線形加速器】から送られてきた粒子を再加速します。

そして「最終ビーム集束用超伝導磁石」は、ルミノシティーを従来の100倍に増加させるようビームサイズをマイクロン単位まで絞り込みができるようにした新機材になります」

「つまり電子やポジトロンなどを集束荷電粒子砲のように高密度ビームに集束させ、素粒子同士の衝突を促進させるわけですね」

率先して彼女が応えた。どうやらゾイド設定の予備知識と現実のテクノロジーが融合し、理解を速めたようだ。

「その通りです。恐らくセイスモサウルス型ゾイドの超々集束荷電粒子砲に採用されている原理です。なお、電子や陽電子の流れである電子ビームでは、一切敵は倒せませんのでご注意くださいね」

「じゃあ、安全なのですか」

「いいえ」

係りの人は真剣な表情をした。

「微量とはいえ、放射線は発生します。加速器稼働中は完全にリモート制御になることはお話があったと思います」

真剣に『遊ぶ』ことをしなければ、危険性もある。係りの人の顔がそう語っていた。

「では、測定器へご案内します。サイズの合うヘルメットの装着をお願いします」

S・L・Mと示された黄色いヘルメットをそれぞれが選んで被り、顔を見合わせ微笑む。

身体に付着した微細なホコリやゴミを吹き飛ばすクリーンルームを通り抜け、クリーム色の長い廊下を抜け、外気遮断が徹底された扉を開く。

僕たちは再び息を呑んだ。エントランスで模型を見た時の四倍、いや、4×4×4の64倍の驚きと感動だ。鋼鉄の門扉に挟まれた、全高20mの正八角形の構造物がそびえ立っている。

実物のゴジラスとほぼ同じ大きさ。隣で押川と泊さんと、彼女とそして僕自身が「うわ……」と小さく声を上げた。

「『パーシヴァル』の衝突点測定器、Be lie・MkⅤです」

これが宇宙の物質構成の根源を突き詰める、人類の英知を込めた測

定装置。

僕らは遂に、人類究極のテクノロジーに対面したのだった。

圧倒的スケールで姿を現した巨大測定器を前にして、僕の父親のこ
とだからおおかた「Mk—V」といってもインコムは装備されてない
ぞ」とか言い出すんじゃないかと身構えていた。

だが僕たちがBeile・Mk—Vを呆然と見上げていたその時、
父は近くの管制室らしき部屋に入って、しきりと電話（施設のもの）で
誰かと連絡を取り合っていた。さっきバスの中で携帯で会話してい
た続きらしい。

真剣な表情に、なんらかのトラブルが発生した気配が読み取れる。
測定器の下に戻ってくると空かさず他の職員さんたちに低い声で「す
ぐさま施設見学者の受け入れを停止、エントランスでの待機を指示。
シャトルバスの運行も止めて、バスも避難対応に当たれるように手配
しよう。防護服の準備宜しく」と囁くのが聞き取れた。どうやら一番
に乗り込んで見学していた僕たちと、後続の見学者との間には大きな
時間の隔たりができていたようだ。

「みんな申し訳ないが、機材トラブルが起きたようだ。さっきのシャ
トルバスもしばらく運行できなくなった。とりあえず防護区画に
移ってもらう。本当に申し訳ない」

父も、父の背後に立つ係の人、職員さんたちも一様に厳しい表情を
浮かべ、穏やかならぬ事態の発生が理解できた。

彼女は、今回も測定器の実物と一緒に撮影をしようと持ち出したア
イアンコングを慌ただしく箱にしまい込む。それまで盛んに視線を
注がれていた貴重な赤いゾイドは、今は誰にも注目されなくなってい
た。

幾分厚めの扉の、昭和の怪獣映画で目にした変電所の施設みたいな
部屋に僕は案内された。映画との違いは大きめのパソコンモニ
ターが幾つも並んでいること。職員が3人詰めていて、数秒ごとに切
り替わるモニターの映像を睨んでいる。ここが緊急避難所であると
誇示するかのごとく、無骨で大きめのダクトと空気清浄機が稼働して
いる。モニターを操作する職員の背中越しに、映像を目にした彼女が

僕に囁いた。

「あれ、【電子・ポジトロン線形加速器】だよな」

彼女は陽電子のことを「ポジトロン」と言うようになっていた。

確かに見覚えがある。最初に見学したセイスモサウルス型の施設だ。

壁に設置された電気の流れを示すLEDで描かれる光が、緑からオレンジ、そして赤になり、点滅も次々と全灯状態に変わっていく。

「いったい何が起こったんだ」

「わからない。わからないけど、かなりヤバいってことだけは俺でもわかる」

今回の押川の返答は的確だった。慌ただしく受話器を取る職員の声に緊張が漲り、僕たちの知らない専門用語が飛び交っている。

父親が戻ってきた。しかし厚い扉が開き、入室してきたその姿に、僕たちは愕然とする。

「緊急事態だ。全員防護服を着てくれ」

その父も黄色で縁取られた白い防護服、ガスマスクのようなフィルタールとゴーグルを身に着けていた。

回転する赤い警告灯だけで、警報などは伴っていない。目まぐるしく明滅する光は、剥き出しのメカニックだらけの空間を警戒色で彩っている。

僕たちは更に安全だという地下施設に向かって徒歩で移動していた。クリーム色で統一された【パーシヴァル】の地下のビームライン通路は、決して狭くはないのにひどく息苦しい。それは単に、いま僕たちが防護服を着て移動していることだけが理由ではないだろう。

ゴーグルが息で曇り視界が狭まる。

ふと思った。両手が塞がっている状態の彼女は、もつと不安ではないかと。

「エリさん、大丈夫？」

「ええ。でも正直、歩きづらい」

厚手の防護服の手袋では、箱の取っ手を片手に提げて持つことは難しい。だから彼女は、身体の前に箱を両手で抱え早足で歩いている。

たぶん彼女のゴーグルも曇っていて、そのうえ両手が使えないので、不慣れた施設内の歩行は覚束ないに違いない。

「持とうか」

「ありがとう。でもこれだけは……」

「そう言うと思った。でもムリと思っただらいつでも任せて」

「うん」

頭部と身体とが一体化している防護服では、頷く仕草も読み取り難い。それでもなんとか彼女の視線を合わせ、励ましたつもりだった。むしろパニック寸前に陥っていたのは泊さんの方だった。

「大丈夫、大丈夫ですよ。これは万が一に備えてのことですよ……」

小柄な泊さんには常備の防護服が身体に合っていない。袖口や裾が余り、緩めのゴーグルで視界も阻まれ、歩き方もぎこちない。

「手をつなごうか」

「……お願いします」

一度後ろ手に伸ばした僕の右腕に、泊さんはギュツともたれ掛かってきた。普段の飄々とした態度とは一変し、か弱い小柄な女子になっている。

「俺が先に行って間を繋ぐ。オマエは柏崎さんたちがはぐれないようにしてくれ」

ゴーグルに曇りのない押川が先頭に出てくれた。息があがっておらず、バスケで鍛えた体力がこんなところで役立っていたようだ。僕らを誘導する職員との間に入り、見失わないよう中間を歩いてくれる。

誰もが不安だったが、この半年でいつの間にか育まれていた互いの信頼感が心強かった。

歩いて到着したのは、【放射光加速器】の制御室。つまりビームラインメインリングのちょうど反対側で、先ほど見学した施設の地下だった。

ここでも防護服を着た何人もの職員が機械操作をしている。係の人が呑気に「にゃんこ」と言っていたことがまるで遠い昔の記憶に思

えた。

防護服のままでは個人の確認が難しいので、名前を書いた20cm
画の急造のシールが背中と右腕に貼られている。その中に『吉山』YOSHIYAMA
のローマ字ルビが振られた名札の防護服を見つけた。一足先にこの
施設に到着していた父だった。

顔を上げ、目を擦ろうとする仕草をした後、ゴーグルで顔が覆われ
ていたことに気付き肩を竦める。周囲を見回した時、彼女が抱いたア
イアンコングの箱で、僕たちに気付いた。

隣に立つ職員の肩を軽く叩いて（少し任せる）の合図を送る。

操作盤から離れ、僕たちのところに来てくれた。

「こんなことになるなんて、全く予想外だったよ。いや、予想不能では
なかったが、天文学的確率でこんな事態に陥るとは」

声がかくぐもり聞き取りにくい。それでもなんとか会話を試みる。

「物理学者にとっては千載一遇のチャンスだろう。だが我々技術者に
とっては最悪の事態となってしまった」

「教えてくれよ父さん、一体なにが起こったのか」

父は再び頭をかく仕草をして、むなしく防護服の頭部の表面を擦
る。

「サージ電流ってわかるか、強力な電磁波が引き起こす電子機器の暴
走だ。大規模停電や通信障害、悪くすると電子部品自体が破損してし
まう現象だ」

「電磁波、ですか」

彼女も父に問いかける。

「電磁波の塊みたいなものを扱うこの施設が、そう易々と磁気嵐なん
かにやられないと過信していた。

甘かった。

太陽のフレア爆発が起きたんだ、施設の電磁波遮蔽施工直前で」

「フレア爆発？ ああ、太陽黒点の異常発達による電磁波障害ですか」

僕も耳にしたことはある。太陽の活動が活発になり、大量の磁力線
が地球に降り注ぐ現象だ。

「……それ、私も幕末の資料で読みました。江戸時代末期の1859

年、東北地方を中心に広くオーロラが目撃されたとの記録が残っています。『新古今和歌集』をまとめた藤原定家の日記にも、平安時代の超新星爆発の記載があると聞きました」

さつきから僕の右腕に縋りついたままの泊さんが囁く。防護服同士が接しているのも、僕にはよく聞こえた。一方のエリさんは、知的好奇心の成せる業か、再度父に問い返す。

「でも私の記憶では、11年の太陽の活動周期とはズレています。確か今度の黒点の発達期は2年後のはずです」

「彼女さん、あなたは非常に素晴らしい学生さんだ。今すぐにもこの施設の職員に採用したいくらいです。」

そう、確かに次の太陽爆発は2年後のはずだった。しかしその太陽の活動を刺激する外部要因が発生していたんだ」

防護服の下で、父親がつばを飲み込む様子がわかる。

「近傍恒星系での極超新星爆発、ハイパーノヴァが発生したんだよ」

「極超新星爆発！」

彼女と声が揃った。僕ら二人には意味が通じていた。

「超新星爆発の影響で、太陽活動が刺激された。2年後の予定だったフレア爆発の発生が前倒しになって、大量の電磁波が降り注いだんだ。今年の夏の暑さは異常だったが、どうやら1、2箇月前から宇宙放射線や重力波の影響も受けていたらしい。よりにもよって『遊び』を削られ、予算縮小で防護設備が脆弱化されちゃった部分にサージ電流が生じ、施設が暴走してしまったんだ」

バスの中で父が唐突に語っていたこと。「つまりシステムに『遊び』は不可欠なことだ」という言葉は、予算不足でシステムの『遊び』を削られた現実への皮肉であったと、今わかった。

「いまごろ神岡のシンチレーターは大騒ぎだろう。此処とは逆に、いい意味でな」

ニュートリノ検出のスーパーカミオカンデのことだ。超新星爆発、極超新星爆発によって、大量のニュートリノが降り注ぎ、小柴教授たちがノーベル賞を得たことは有名だ。この粒子加速器自体、岐阜の神岡鉱山跡の検出器に向かい大量のニュートリノを発射するニュート

リノ振動実験をしているくらいだから、両施設の関係は密接だった。その時「主幹、吉山技術主幹！」と声がかかる。「彼女さんたちはお前が守ってやれ」と言い残し、父は慌ただしく去っていった。

「どういうことなんだよ、オイ！」

押川が堪らず声を上げ、泊さんも不安げな視線で見上げる。

「僕だって詳しくはわからないさ」

「わからなくてもいい、わかる範囲でいいから、俺たちにも何が起きているか教えろ」

「落ち着いて押川君」

詰め寄る押川との間に彼女が割って入ってくれた。大切な箱は、泊さんが抱えていた。

「つまり、磁気嵐による機器の暴走だ。みんなが防護服を着込んでいるということは、何らかの放射線の発生が予測される。問題はその放射線の種類だ」

「放射能なんてみんな同じじゃないのか！」

ここで押川を責めることは酷だろう。泊さんも同様の思い違いをしていたぐらいだったから。

「落ち着いて聞いてくれ。僕とエリさん二人の知識でわかる限り、できる限り簡単に説明するから」

押川が大きく頷く。頷きながら、大きく深呼吸をしている。防護服のフィルター越しに、空気が吸い込まれる音まで聞こえた。

「例えばレントゲンのように、比較的人体に影響が少ないものをX線という」

それはわかる、という仕草をする。

「X線の仲間みたいなものがガンマ線だ。原子爆弾や、さっきの超新星爆発なんかのときにも発生する。確かに危険な放射線の一種だが、まだマシな方なんだ」

「原爆が、マシなのか。じゃあ、なにがヤバいんだよ！」

「それは……」

僕は必死で言葉を選んでいった。α線やβ線、中性子線を説明したところで混乱させるだけだ。判り易い言葉で説得するには、時間と知識

が足りない。

「電子とポジトロンとの対消滅が発生するんです」

代わって彼女が、素人の理解力を度外視して答えていた。

「頼むよ、俺の頭でもわかるように、なんだよその前向きな考え方みたいな奴は！」

一瞬、その場が凍り付いた。

「なんだよ……」

当惑する押川を前に、僕と彼女は顔を見合わせ、思わず二人で吹き出していた。

「オマエ……ホントにいいやつだ、ありがとう！」

防護服の上から、僕は押川をバンバン叩いて笑った。

彼女も笑っていた。緊張感が一気にほぐれた。

「私からも……お礼を言わせて……ありがとう、押川君」

涙は拭えないが、彼女も目尻に指を当てている。

絶妙のタイミングで、泊さんが呟く。

「ポジティブ・シンキング」

その一言に、僕と彼女はうずくまって再度笑いをこらえる。さすがに大爆笑は、必死で作業する職員さんたちに失礼だったから。

笑いを堪え、なんとか彼女は説明を試みる。

「……ポジトロンって、陽電子のこと。普通はマイナスの電荷をもつ電子が、プラスの電荷をもつ逆の性質を持つ電子のことなの。覚えてる？ 中学でもイオンのことは勉強したと思うんだけど」

「マイナスイオンのことか」

また彼女が笑ってしまった。完全にツボに入ってしまったらしい。同時に落ち着きを取り戻し、こんな状況なのに、今までになく嬉しそうにみえる。

「マイナスイオンっていうのはデタラメなんだよ」

笑いの収まらない彼女のフォローに、今度は僕が入った。

「そのうち教えるさ。今度は一緒に勉強しようぜ、無事だったらな。

いいか、陽電子⇨ポジトロンは、プラスの電荷を持っている。だからマイナスの電荷を持つ普通の電子とぶつかると、対消滅といって電

気がショートしてしまうんだ。ここの強力な粒子加速器の出力だと、大爆発を起こすくらいの大量のポジトロンを発生できる。だから父さんたちは慌てているんだ」

「ライフルで撃ち出せるものなんですよね」

泊さんもだいぶ落ち着いて来たようだ。小柄な文学少女も、某汎用人型決戦兵器の空中要塞型使徒の狙撃作戦は知っていたらしい。

「讃岐八島の扇の的、『平家物語』が元ネタぐらいわかります」

そこはやっぱり文学少女でした。

「確かにアニメでは、『ポジトロンライフル』という超長距離狙撃をしていたけど、あれはあれでインチキなんだよ。実際の陽電子を通常空間で発射したら、大気中の酸素や窒素なんかの空気の分子や電子と反応して電子対消滅を起こしてしまう。その時には、宇宙で起こった超新星爆発のように、大量のガンマ線を発生して周囲の全てを破壊してしまう可能性があるんだ。だからもし本当に『ポジトロンライフル』を使用したら、E×アンゲリ×の自爆だけでは済まされずに、周囲を巻き込んだ局地的大爆発を引き起こしてしまう迷惑極まりない武器となるんだよ」

「やっぱりわからん」

押川なりのケジメのつけかたなのだろう、腕を組む姿が「理解できないことを理解した」と伝えていた。

もう一度彼女が真剣な声になる。

「さっき聞こえてきた職員さんの話では、この施設で発生したポジトロンが『パーシヴアル』に流れ込んでいるようなんです。

つまりいま明君が説明した『ポジトロンライフル』のように、『パーシヴアル』本体を巻き込んで施設ごと大爆発する危険性があるということ。

宇宙の神秘の根源を探るための粒子加速器が、破壊の権化になってしまう。

まるでデスザウラーの荷電粒子砲のように」

冷静になった僕たちは、改めて彼女の説明で危機的状況が迫っていることを認識した。

粒子加速器が、本物の荷電粒子砲になるということに。

彼女のスマホに、各地で起きている大規模停電や電波障害などの情報がヘッドライン表示されていた。被害は日本だけでなく、世界規模に広がっているらしい。「らしい」というのは、情報がとびとびでしか入ってこないから。父親が言う「サージ電流」が、きつとたくさんの電子部品をこわして通信手段を奪ってしまったのだろう。

僕たちは閉じ込められていた。本当なら、僕らみたいな一般人なんかさっさと追い出して作業に集中したいただろう。でも施設のあちこちから放射線が発生している可能性があつて、万が一に備えての地下待機となつていた。地上でも軽いパニック状況になつていようだが、それでも四人一緒なのは、本当に心強かつた。

「どうなると思う?」

折りたたみ椅子に座り、クリーム色の壁にもたれかかつて彼女が咳く。僕は限られたゴーグルの視野を、精一杯首を曲げ、彼女と視線を合わせる。

「原子炉が爆発したわけじゃないし、安全第一を考えてのことだと思う。じきに落ち着くと思うよ」

「だよ、ね」

アイアンコングMk-IIを入れた大切な箱は彼女の左隣にあつて、左手を軽く乗せている。落ち着いては見えるけど、やっぱり不安に違いない。

「ごめん、巻き込んだじゃつて」

一瞬の沈黙。

「明君が宇宙でスーパーノヴァを起こしたなら、怒るけどね」

彼女は微笑んでいた。

「感謝してるの、施設見学に誘ってくれたこと。」

最初ジェノザウラーの荷電粒子砲を理由にしたけど、本当は、お母さんとの思い出に『けじめ』をつけたかった、つてことの方が大きかつた。お母さん代わりのアイアンコングに施設見学をさせてあげたあとは、これでゾイドとは距離を置こうと思つていたんだ、お兄ちゃん

みたいに」

薄々は気付いていた。彼女の兄の浩先輩が、僕の兄にファンブック一式を渡してしまったことから。

僕たちは成長していく。子どもの頃に夢中になったおもちゃだつて、やがては飽きられて、壊れたり、捨てられたりする。こともある。「大人になってもおもちゃで遊んでいる人も多いじゃないか！」って、いかかもしれないけど、子どもと大人とのおもちゃの付き合い方は違う。

子どもにとっておもちゃは友だちで、立場は対等だけど、大人にとってのおもちゃは、コレクションやレアアイテムとして、保護する立場になってしまう。

ゾイドのスイッチをいれてカッコよく動くのを見て、大人はギミックやデザインに感動するかもしれない。でも、ゾイドのコクピットに自分が座って、いっしょに大地を駆け巡る想像には届かない。無改造のままガシャガシャと敵ゾイドと戦わせて夢中で遊ぶこともなくなる。

ふと、〈フロントサウルス〉のフレーズが思い浮かんだ。

☒フロントサウルス あと百年くらい 遊んでいきたいの、リフレイン。

しかし、ひとつのおもちゃと百年間遊び続けるなんて不可能だ。仕方がない、それが大人になるってことなのだから。もしかしたら彼女の母親はこのフレーズに救いを求め、歌を聴いていたのかもしれない。

「この見学会が終わったら、アイアンキングを手放そうと決めていたの。その時はこのゾイドを大切にしてくれる？」

突然の告白。いや、愛の告白ではないんだけど、動揺して思わず聞き返す。

「Mk-II 限定版を、僕に？」

「絶対安心なもの。それに明君が飽きても、お父さんの方がもっと大切に、修理もしてくれそうだしね」

間違いない、と、心の中で苦笑する。

それにしても、あの幻の限定版ゾイドが、僕のものになる。むかしPKを見逃したが、それを上回るメカ生体版のアイアンキングⅡだ！

でも、いいのだろうか。彼女の母親との思い出の品を受け取るなんて。

彼女は打ち放しのコンクリートの天井を見上げていた。

「いろいろあったけど、夏休みなんてあつという間。鎌倉に行ったことも、一緒に数学を勉強したことも。

そして高校を卒業するのもあつという間。もう進学か就職か、決めなきゃならないんだもん。

でも明君とは、卒業してもずっと一緒にいたいな」

えっ

また母親の顔がよぎる。

オーバーリアクション気味に「グツジョブ」とサムズアップを構える姿で。

そんな僕の脳内を気に留めず、彼女は続ける。

「天文学的な確率でしか起こらないよね——施設見学と、フレア爆発が重なるなんて。きつと十年後の夏には、いい思い出になっている筈だよ」

「確かに、ものすごい思い出になるだろうね」

有名な歌詞のフレーズを、彼女は歌うように囁く。

胸の高まりの原因がわからない。自分の物欲に呆れると同時に、彼女の信頼を得られたこと、ゴージャルの隙間から覗かせた澄み切った笑顔に、口には出さないが、かなり、ものすごく、ドキドキしていた。

落ち着かない男子が、若干もう一名。

「……オマエ、場所交換しろ」

僕の前に白い防護服が恨めしそうに立ちはだかっていた。

あ、言っただけでなかったけど、女子二人に挟まれるポジションで座っています。

右側には泊さんが座っています。数学の勉強会のことであつて、どうやら僕は小柄な文学少女に気に入られたようです。「両手に花」っ

て、最近ではセクハラになるらしいので言えないけど（↑言ってる）、まんざらでもありません。施設内の気温は「超伝導加速空洞用大型ヘリウム液化冷却システム」という、舌を噛みそうな長い名前の冷房装置のおかげ一定に保たれていて、真夏の暑さは遮断されているので、密集して座っていても全然暑くありません。

まるで泊さんの保護者のように、彼女が囁いた。

「……ねえ、もしかすると彩花、君のことを意識しているんじゃない」「……まさか。そんな素振りはないけど」

「……ほら、危機的状況に陥った男女の仲が急激に接近するっていうアレ……なんて言ったかな、コペンハーゲン解釈？」

「……ストックホルム症候群」

珍しく彼女がボケて（それとも天然？）、空かさずツツコむ。この阿吽の呼吸が心地よい。

「……いつのまにオマエらやっぱり」

一方の押川君は、「いつのまに」と「やっぱり」を同時につかう文法上の矛盾も気になげず、呪文を唱えるような低い声で囁いた。

「オレにだって心に決めた鈴木先輩ってひとがいるんだからな。絶対幸せになってやる」

こんな状況でもブレない押川君、みんな君のことは大好きなはずだよ、恋愛以外の対象としては。

その時不意に、作業に集中する職員さんたちの間から漏れ聞こえてきた。

「——【金属生命体コア】のインピーダンス整合が——」

この期に及んで【金属生命体コア】はないだろうと聞き耳を立てた。よく聞いたら【金属磁性体コア】の聞き違いでした（あたりまえ）。張り詰めた雰囲気の中、職員さんたちの会話は続く。

「——超伝導加速空洞内での加速勾配が低下しない。陽電子の加速制御はできないのか」

「偏向電磁石周辺への接近は危険です。アレス空洞の高次モード減衰用導波管が破損し、炭化ケイ素吸収体が漏洩している可能性があります。航跡電磁場が不安定でリアクションも不足しています」

「ビームライン分岐点からの干渉は」

「未確認です。しかしモジュレーターを切断したら対消滅の危険性も考えられます」

「施設の維持は優先できないのか！」

もちろん、僕たちにわかるわけもない。しかし、彼女が言った荷電粒子砲の脅威は、リアルに迫っていることはわかる。さつき彼女に言った「原子炉爆発」のように、大規模な核汚染が起こることはないだろう。だいいち扱う核物質の分量が違い過ぎる。放出される荷電粒子だって、崩壊時間が1億分の1秒、1兆分の1秒単位だから、直接人体に降り注ぐことがない限り、被曝の可能性だって低い。問題は、可能性は低いけど、暴走している箇所電磁波が部分的に高く偏ってしまい、近づけなくなっていることらしい。

急に、数人の職員さんと共に、父親の視線が一斉にこっちに向けられた。最初は気のせいかと思ったが、何人かが手のひらをこちらに向けて会話をしている。明らかに僕らを示しているようだ。

部外者なのに、なんの必要があるのだろう、と考えていると、父親が僅かに速足で近づいてきた。

「柏崎さん、あなたにお願いがあります」

父の口調が変わっていた。

彼女は一度僕を見て、「はい」と肯き父を見る。

「時間が無いので手短に言います。そのゾイドを、アイアンコングを、我々に譲ってください」

「どういう、ことでしょうか」

当惑する彼女。当然だろう。父は幾分早口になっている。

「詳しい説明は省きます。現在電力を供給しているモジュレーターへのラインを安全に切断するために、極細いモジュールの中に異物を侵入させ、システムダウンを図りたいのです。しかし、モジュール内には無数の荷電粒子が放出されていて、近づくことができないのです。

だから人間の代わりに、そのゾイドを安全圏より侵入、到達地点で荷電粒子によって破壊させ、強制システムダウンを行う。時間が無い、このままではあと30分もすれば、『パーシヴァル』自体が一斉に

電子対消滅を起こし、施設ごと破壊されてしまうのです。

そのゾイドが大切なものとはわかっています。しかし、数千億円を投下し、建設されたこの施設全てが崩壊することは避けたい。是非とも協力を願います」

そして深々と頭を下げた。

予想外の申し出だった。

「なんだよそれ」

僕は父親に食いかかる。普段決してこんな口調になったことは無い。おそらく初めての反抗かもしれない。

「このゾイドにはエリさんのお母さんの思い出が詰まっていることは知ってるだろう！」

「わかっている。しかし、どうしようもないんだ」

父もまた、いままで聞いたことのない荒い口調だった。

頭の中が沸騰するような感覚。「なぜ彼女のゾイドが、荷電粒子の中へ」という理不尽な想いがぐるぐる回る。まるで粒子加速器のメイリングを巡るポジトロンのように、光に近い早さで。

しかし、考えている時間はない。即断が必要だった。

「わかりました。使ってください」

「エリさん！」

僕は振り向く。彼女はまた笑っていた。しかし悲しい微笑みだった。

「いま、この粒子加速器を救えるのは私のゾイドしかない。だったら協力します。この施設が好きだから、ここを守るため、そしてここにいるみんなを守るため。お母さんだって、許してくれるはずです」

「ありがとうございます。早速電池を準備させます」

感謝の余韻も残さず、父は慌ただしくアイアンコングの入った箱を持ち去っていく。あまりの展開に、僕は呆然と父の背中を追うしかなかった。

「こんなことって……」

それ以上言葉が出ない。

こんな皮肉であるだろうか。父親は、僕に代わって彼女のゾイド

を完璧に修理してくれた。だから彼女も、ある意味僕以上に父を信頼してくれていた。その父親が、今度は彼女のかけがえのないゾイドを奪っていく。

理屈はわかる。父の言う事は嘘ではなく、システムダウンを起こしてこの施設を守るためには、彼女のゾイド、アイアンコングMk-IIが必要なのだろう。それに外部から同じような機材を持ち込んでいる余裕もなく、やむを得ず申し出たに違いない。

だが、「荷電粒子によって破壊させ」と言うことは、跡形もなく消滅するということだろう。

所詮おもちやであって、プレミア価格のものをネットオークションで落札すれば、同じアイアンコングMk-IIは手にはいるだろう。しかし、彼女のゾイドは、彼女の思い出はどうなる。

僕は悔しさと悲しさと自分の無力さで胸がいっぱいになってしまった。

彼女もまた、俯いたまま座り込んでいた。

(これじゃ駄目だ)

僕は無理やり自分を奮い立たせる。このまま落ち込んでいても、悲しい思い出が、十年後も二十年後も残り、僕たちを苛むことになる。そんな思い出はイヤだ。

決して優秀ではない僕の頭脳を、もう一度サイクロトロン式の粒子加速器なみに回転させる。

きっと父のことだ、時間との勝負とはいえ、リスク回避の準備時間は取るに違いない。腹部の単三の乾電池を入れるだけでなく、ビームランチャーやマニューバスラスタ、連装電磁砲などを外す最低限の軽量化作業はするはずだ。

「見送ってやろう。まだ間に合う」

僕は立ち上がって彼女の手を握った。

防護服越しで、始めて握る彼女の手は、思った以上に華奢で繊細だった。

彼女も顔を上げた。

「そうだよ。見送ってあげたい。行こう、アイアンコングのところ

へ

どこまで近づけるか、どこまで見守ってられるかわからない。
それでも近くにいたい。

人間の感情は、素粒子物理学のように不条理なものなんだ。

僕たちは、立ち上がった。

⑮ (最終話)

目一杯に水が入った数十個の大きなビニール袋が無造作に積み重ねられている。ちよつとでも傷つけただけで、床が水浸しになりそうな作業現場の中心のテーブルの上に、赤いアイアンコングが置かれていた。「明君、あそこ」

父親の居場所はすぐにわかった。「Keep out」の黄色いテープの向こう側、『吉山』の名札を貼った白衣の防護服が、タブレックト片手に慎重にアイアンコング Mk-II の作動状況を確認していた。アコーディオンのじゃばら部分のように伸び縮みする俄にわか作りのマジックハンドで、アイアンコングを何度も持ち上げたり降ろしたりしている。そしてマジックハンドの先端に付けられたフックで、腰のスイッチをONにするリハーサルを行う。

大人たちが大きな赤い玩具を取り囲み、動かしている光景は滑稽だ。しかし、その赤い玩具が、唯一この巨大施設を守る手段と思うと、自然に緊張してくる。

「来たのか」

父親も僕たちにすぐ気付いた。積み重ねた水入りのビニール袋が、ビームラインを開放した際に飛び出す荷電粒子を防ぐバリケードであつて、そこが絶えず被曝の危険性と隣り合わせの場所だと語っている。親・保護者ならば、成長期の子どもたちが近づくのを阻むはずだが、仕事に集中していることと、アイアンコングの行方を必ず探しに来るであろうことを予測していたのか、少し眉をひそめただけですぐにタブレックトに視線を落とす。

予想通りアイアンコングは軽装化されていた。右肩の大型ビームランチャー、左腕の連装電磁砲、背中の高高度対空ミサイル、マニユーバラスターユニットは外され、ほぼノーマル仕様のアイアンコングのように見える。逆に腰のスイッチが延長されていて、マジックハンドのフックで操作しやすくなっている。

「みんなが、お母さんのゾイドを……」

彼女の言葉はそこで途切れる。

言葉の先に秘めた想い。何を考え、言おうとしたのだろう。それを尋ねることはできない。

「本当にあれを使うのか」

信じられない、という気持ちが押川の口調に込められている。

「絵梨、大丈夫？」

泊さんの問いかけに頷く彼女の肩は、震えている。

一瞬、僕は父親に代わって謝ろうと考えたが、やめた。僕が謝っても、なんにもならない。もっと悲しくなるだけだ。

「信じよう、あのアイアンコングMk-IIが、みんなを守ってくれることを」

悲しい記憶だけを残さないような、精一杯に勇気付けられるような言葉を考えた。それだって、何の役にも立たないのだけど。

まるで出撃直前の戦士のように、アイアンコングMk-IIは静かに刻の来るのを待っていた。

画面全部をグリーンに発光させたタブレットを振って、父親がオペレーション開始の合図を送る。

赤い警告灯が回転する。

ラインの前面に積まれた水入りビニール袋が一斉に取り払われた。隔壁が開かれる。

縦横がだいたい50cmほどの、赤銅色に輝く内壁が露わになり、リハール通りにマジックハンドでアイアンコングMk-IIが持ち上げられる。

空洞の中に置かれたあと、慎重に設置場所を確認している。スイッチが入れた。アイアンコングが力強く動き出す。

思い出のゾイドとの離別の余韻に浸る間も許されず、無慈悲に隔壁が閉鎖され、一斉にビニール袋が積み上げられた。

集まっていた作業員たちが部署に向かって散っていく。

数人の担当者を現場に残し、父が小走りで近づいて来た。

「Beile・Mk-Vの機能を応用して、制御室でコングの動きを卜レースできる。ついてきなさい」

父の背中を僕は追った。

制御室に戻り状況を確認する。

相変わらず専門用語が飛び交う室内で、父が一つのモニターを指さした。

画面には、空洞内の粒子密度を示す数値が滝のように迸り、分割された別画面には荷電粒子の流れを示すグラフが映っている。

「このグラフのピークが洞内の異物、つまりアイアンコングを示している」

父がグラフの異常に高い頂点を指さす。グラフの頂点はゆっくり変化している。

「現在順調に歩行している。このまま目標地点に到着すれば、オペレーションを完遂してくれる」

「距離は？ どれくらい歩けば目標に」

一度タブレットを操作し、画面を変えている。

「凡そ50 m、誤差は5 m前後」

「50 m。遠いね」

「遠いな」

苛立たしさと、悲しさを混ぜたような声。防護服の下、きっと父は複雑な表情を浮かべているだろう。父の辛い姿に耐え切れず、僕はひたすらにグラフの変化を見つめ、空洞内の戦士に想いを馳せていた。

この瞬間も、アイアンコングは孤独な旅を続けている。

ギアの回転を利用し雄叫びを上げるギミックも、真空に近い空洞内では響くこともない。

コクピットに点る赤いムギ球の灯りだけを頼りに、絶望的な静寂と、膨大な荷電粒子の奔流に抗い、たったひとりで進んでいるのだ。

突然、彼女が僕の手を強く握った。

正面を向いたまま、強く、強く握った。僕らの想いは同じなのだ。

心の中で強く願う、（がんばれ）と。

「……がんばれ」

心の声が漏れる。

しかし、それは僕たちの声ではなかった。グラフを見つめ、事態の終息を願う職員たちの間からだった。

「頼む、アイアンコング」

「がんばってくれ、お前だけが頼りなんだ」

「止まるなよ、アイアンコング」

「アイアンコング、お願いだ」

無数の声が、祈りを捧げるように囁いている。

「アイアンコング、がんばれ」

いつしか僕も声に出していた。

彼女はだけは無言のまま、グラフを見つめていた。

グラフのピークの移動が目に見えて緩やかになり、父が低く呟く。

「モーターがやられたか……」

洞内を飛び交う膨大な量の荷電粒子は、表面のプラ材を貫き、容易に金属部分に到達する。単純な構造とはいえ、電磁気を利用し回転するモーターにトラブルが発生する可能性は高い。

制御室に落胆の声が起きる。

それでも僕たちは信じた。信じていたかった。

「がんばれ、がんばれ、がんばれ」

言葉に意味は無い。でも、応援せずにはいられない。

「がんばれ、がんばれ、がんばれ」

いつしか、押川も泊さんも、僕の祈りに合わせている。

「がんばれ、がんばれ、がんばれ！」

そんな祈りを嘲笑うように、グラフのピークは緩慢な動きしかなかった。

（祈りなんて無駄なんだ）

絶望に打ち拉がれたときだった。

「お母さん」

心の底から湧き上がった声だったと思う。

「お願い、みんなを、この粒子加速器を助けて」

現実には映画みたいに甘くはない。祈ったところで通じるはずなんかない。通じたとしても、それは必然ではなく偶然に過ぎないんだ。

（それでも信じたい。奇跡というやつを）

制御室内に動揺が起こる。

「動いてる」

止まっていたグラフのピークが、再び力強く移動を開始していた。偶然か必然かなんて、もうどうでもいい。

「いけるぞ」

動き出したグラフが、目標を示す赤い縦軸線に着実に接近していく。

「もう少し、もう少しだ」

「がんばれアイアンコング Mk-II」

「頼むぞ、アイアンコング Mk-II」

「進め、アイアンコング Mk-II」

「おねがい、おかあさん！」

制御室内はアイアンコングへの声援（エール）に満ち溢れたのだった。

※

翌日の新聞紙面は、太陽のフレア爆発の記事で埋め尽くされていた。

通信障害、交通システム異常、電子機器の破損、銀行口座のデータ破壊など、現代情報化社会がどれほど脆いものか、まざまざと見せつけられた。

紙面の片隅、僕たちが見学した粒子加速器「パーシヴァル」の一面で、施設のトラブルが発生したベタ記事が掲載されていた。重大事故に至らず、直接の日常生活に影響のない事件だったので、極少数の関係者を除いて関心が持たれることはなかった。

そして、放射線の荷電粒子が崩壊し、暴走の危険がなくなったモジュレーター（加速器）の空洞内に、赤いプラスチックの塊と化した異物が残っていたことが語られるはずもなかった。

僕たちには、あの事故からいろいろあった。

アイアンコング Mk-II 限定版は、ネットオークションでとんでもないプレミア価格がついている。それでも数千億円の科学施設を守った代償としては安いものなので、父を窓口にして彼女に弁償を申し出たのだが、彼女はきっぱりと断った。

「母も喜んでいると思います。誰も見ることでできなかった、荷電粒

子が飛び交う光景を目にする機会を得られたのですから。

その代わり、お願いしたいことが二つあります。一つは、これからも施設見学を許可してくださること。そして二つ目は、施設内のにゃんこと遊ぶことです」

その時の彼女の笑顔は、青空の下の紫峰のように晴れやかだった。

夏休みが明けて一週間。僕たちはおつきあいを始め、一緒に同じ時間の電車で通学している。

「おはよう」

「おはよう、エリさん」

駅の改札で落ち合い、歩いて学校へ向かう。9月になっても残暑は厳しく汗ばむようだ。

「進路は決めた？」

高校までの通学路、始業式の日配布された進路希望調査の書類提出のことを話し合う。

「いろいろ考えたんだ。それでやっぱりやってみたくなくなった、明君のお父さんの務めているような施設で働いたり、研究したりすることに。」

だから理系で技術系の大学に入って技術者を目指そうと思う。

簡単じゃないことはわかっているけれど、チャレンジしてみたい。

私のお父さんにも聞いたら、自分の好きなようにやりなさい、って言ってくれたんだ」

「僕も出来る限り協力するよ。父親にも採用へのルートは聞いておく」

「ありがとう。これからもずっとお世話になります、よろしくね。ところで彩香は数学大丈夫なの？」

休み明けとはいえ、二週間後には早速定期考査が控えていて、のんびりしている余裕はない。

「大丈夫です。また教えてもらっています」

「あんまり明君を頼っちゃダメだよ」

相変わらず保護者のようだ。

「そういえば、ブロントサウルスについて伝え忘れていたのだけど」

「えっ、なになに」

そして相変わらず食いつきがいい。

「ブロントサウルスがアパトサウルスのシノニムで、ブロントサウルスの種自体が消滅した、っていう話があったよね」

「残念過ぎて、忘れられないくらいに覚えてる」

表情に無念さが浮き出ている。

「でも最近、いままでに採掘された化石をよく調べたら、アパトサウルスと違って来た個体のなかに、明らかにアパトサウルスとは異なった種があったことが証明されたんだって。つまりブロントサウルスという種が、もう一度認められることになったんだ」

「じゃあ、これでレベッカのアルバムタイトルも「アパトサウルス」にならないで済むわけだね」

それは杞憂つてもものでしょ、と笑う。

「やっぱり思い出だもの。よかった」

小さなことだけど、それなりに気掛かりだったのだろう。

「これでブロントサウルスの名前は、100年後も2000年後も残るね」

空を見上げる唇が、微かに「おかあさん」と唱えたようにも見えた。

「そういえば、押川君は？」

「休み明け早々に鈴木先輩に告白して玉砕して、ショックで遅刻してくるんじゃないのかな」

「でもあれ、押川君じゃない？」

エリさんが指さす先、校門前で丁寧に会釈する悪友の姿があった。

「先生、おはようございます」

登校指導を行っている、文芸部顧問の相沢先生のそばに立って、懸命に話題を探している。

内容はない。「暑いですね」とか「テスト近いですね」とか。

僕たちが登校してくるのに気付いて、大げさに挨拶する。

「おはよう！ 吉山君たち」

オマエ、いつから「君」付けで呼ぶようになった？ 違和感アリアリじゃないか。

「では、ボクは友人たちが来たのでこれで失礼します。5時間目の授業を楽しみにしています」

押川が駆け寄ってくる。

「やっぱり相沢先生って、ステキだよな」

「やっぱり、か。あつというまに状況を理解した。」

「オレ、前から相沢先生に憧れていたんだ。別に先生と生徒、なんて大それたことは考えていないけどさ。だがチャンスがあれば必ず掴む自信はあるぜ！」

うわあ

ベタ過ぎる展開に、何も言えなくなる。期待しているのは本人だけじゃないだろうか。

「オマエ、いま『期待しているのは本人だけ』とか思っただろ。……リア充爆発しろ」

昇降口を過ぎ、僕が靴を履き替えるのを待っている間に、さっさと教室に上がっていく。実にわかりやすいやつだ。

「明君、私も先に行くね」

「わかった。じゃあ僕らも行こうか——アヤちゃん」

「は〜い」

僕の隣で、小柄な文学少女が微笑んでいた。

コペンハーゲン解釈、ならぬストックホルム症候群が理由かどうかわからないが、事件の後、Beile・Mk—V測定器の前で、僕は泊さんに告白された。

「だって、絵梨とは付き合っていないんですよね、車の中で『彼女じゃないよ』って言っていましたし」

正直迷った。

もちろん、女子から告白されるのはとても嬉しい。それに泊さんって、ちつちやくて純朴で童顔っぽい美少女系だと、意識してからしみじみ思った。

でもこの文学少女は、どこかしら純文学のヒロインみたいに、恋に恋するプラトニックなイメージが付きまとっていて……いやいやいや、僕は別にプラトニックがイヤだとか言ってるつもりはない。言っ

てるつもりはないけれど、大正浪漫の古い少女漫画みたいなお付き合いは、到底想像できなくて（父親曰く「ハイカラなんとかさんが通る、みたいだな」。全然捻ってないじゃん）。

でも、可愛いし、性格良いのも確かだし。

「——彩香は本当にいい娘だよ。付き合っただけでもいいと思うんだけど」

エリさんのアドバイス。ときに純粋な親切心は、恋心を深く傷付けることに気が付いていない。

泊さんはキラキラ輝く無邪気な笑顔で言った。

「もう一度鎌倉に行きませんか？ 今度は二人で」

「……うん、行こう、二人で」

頼むからエリさん、隣で「おめでとう！」って応援するのは止めてくれ、と、心の中で絶叫していた。

教室、朝のSHR。

提出するために机の上に置いた進路希望調査用紙を見つめていた。

まだ二学期は始まったばかり。でも、もう高校一年生のほぼ半分は終わってしまったともいえる。

困難な道だが、彼女はしっかりと目標を定め、歩き出している。だけど僕は、自分が何になりたいのか、どんな大人を目指すのか、まだ漠然としていてやっぱりわからない。

迷っている進路が二つある。

数学を活かした仕事といえば、数学の先生になること。教育学部がある大学へ入って、免許を取って採用されること。アヤちゃんや絵梨さんに数学を教えてみて、もしかしたら向いているんじゃないか、とも考えた。

そしてもう一つ。

タカラトミーの社員になって、ゾイドを開発することだ。どうやらこの夢は、絵梨さんも諦めてはないらしい。もし僕がゾイドを開発したら、なんて名前のゾイドにしようか。

ふと、粒子加速器見学で聞いた黒猫三兄弟の名前を思い出す。黒猫、じゃなくて黒豹がいいな。パンサーアイン、ツヴァイ、ドライ……

ドライパンサーって、どうだろう。

夢は膨らむ。

後ろの席から突かれ、慌てて希望用紙を重ねて前に回した。

一時限目のチャイムが鳴る。

先生が入ってきた。

窓の外に澄み切った秋の空が広がる。

青空の下の紫峰を思い出す。

見学に、来年も一緒に行きたい。

彼女と、ゾイドと、荷電粒子砲を。

『彼女のゾイドと荷

電粒子砲』 終